世界遺産

石見銀山遺跡の調査研究 9

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 9

平成31（2019）年3月
島根県教育委員会・大田市教育委員会

世界遺産

石見銀山遺跡の調査研究 9

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 9

平成31（2019）年3月
島根県教育委員会・大田市教育委員会

昆布山谷地区第5地点　Ⅰ区下層検出遺構（西より）

金森家地点検出 SX01釜場跡（東より）

■例　言

1．本書は、島根県教育委員会と大田市教育委員会が実施した平成29・30年度の石見銀山遺跡総合調査研究事業の概要と、県市担当職員及び調査関係者が同事業で行っている調査研究活動の成果を掲載するものである。
2．石見銀山遺跡の総合調査研究は、大きく基礎調査研究とテーマ別調査研究の２分野で構成されており、平成29・30年度に実施した調査事業の概要をⅠにまとめた。また同年度に石見銀山に関係して発表された論文等の関連情報をⅡに掲載した。Ⅲでは県及び市が行う総合調査研究事業の成果の一部を掲載した。
3．本書の編集は、大田市教育委員会教育部石見銀山課の協力を得て島根県教育庁文化財課世界遺産室で行った。

■目　次

Ⅰ　平成29・30年度の総合調査研究事業

1．総合調査研究事業の概要……3
2．基礎調査研究事業
（1）発掘調査……3
（2）石造物調査……5
（3）文献調査……7
（4）科学調査……8
（5）地図・地名、人権・同和問題調査……9
（6）教育普及方法等調査……9
（7）生物環境調査……10
（8）資産保全調査……10
3．テーマ別調査研究事業
（1）経緯……10
（2）最盛期石見銀山の復元研究……11
（3）東アジア鉱山の比較研究……11
4．調査専門委員会・調査整備活用委員会の開催
平成29年度
（1）第４回調査整備活用委員会……13
平成30年度
（1）第４回調査専門委員会……13
（2）第５回調査整備活用委員会……13
5．調査研究成果の公表
（1）島根県……13
（2）大田市……14

Ⅱ　平成29・30年度の石見銀山遺跡関連報告書・出版物

報告書　論文　関係書籍等……19

Ⅲ　石見銀山遺跡関連調査研究

山手貴生　昆布山谷地区の発掘調査成果……25
安藤誠也　大久保間歩における2017年11月から１年間のコウモリ類個体数の推移……55
伊藤大貴　史料紹介　島根県立古代出雲歴史博物館蔵「嘉戸家文書」所収の中世史料写
……縦組１……70

I

平成29・30年度の総合調査研究事業

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 9

１．総合調査研究事業の概要

島根県と大田市では、石見銀山遺跡の世界遺産登録を目指して平成８年度から総合調査を実施し、その成果があって平成19年７月２日に世界文化遺産に登録された。しかし、石見銀山遺跡については、その価値がわかりにくいこともあり、登録後も遺跡のもつ価値をより高めるために調査研究を継続することとなった。

世界文化遺産登録後に継続して行う調査研究は、それ以前から実施していた基礎調査研究（考古学的研究、歴史・民俗学的研究、自然科学的研究）に加え、テーマを絞り込み、多分野の研究者が共同して調査研究を行うテーマ別調査研究も開始することになった。

基礎調査研究は、発掘調査、石造物調査、文献調査、科学調査、間歩調査、地図・地名・人権同和問題調査などを組織的に実施しており、それらの成果はまとまり次第、報告書を刊行している。また、登録後には生物環境調査と資産保全調査なども追加して実施している。

テーマ別調査研究は、「最盛期石見銀山の復元」と「東アジア鉱山の比較研究」を大きなテーマとして、およそ３年周期の共同調査研究とした。

この研究では、考古学、文献史学、歴史地理学、地質学、鉱山学、植物学などの外部研究者に石見銀山遺跡客員研究員として参加を求め、年２～３回の共同検討会を開催しながら進めている。

第１期の成果は、平成22年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書１』として刊行されている。しかし、わずか３年間の調査研究では「最盛期の石見銀山」を復元できたとは言いがたく、第２期の３年間も同テーマを継続して実施することになった。平成23年度から３年間にわたり銀流通とその拠点に焦点を当て、主に街道と港・港町を対象とした調査研究を行った。

平成26年度からは、「石見銀山鉱山町の変遷」を第３期のテーマとして、石見銀山の鉱山町を形成する大森町・銀山町の変遷と画期を明らかにするための調査研究を実施し、平成30年度末に報告書が刊行された。

本調査研究事業に伴う平成29・30年度の成果物は上記のほかに、発掘調査報告書、石造物調査報告書、歴史文献調査報告書、近代史料集、本年報兼調査研究報告を刊行している。また、建造物修理にかかる報告として、伝統的建造物群保存地区で行われた金森家修理の報告書が刊行されている。詳細は後掲の刊行物一覧のとおりである。　　（島根県：今岡）

２．基礎調査研究事業

（１）発掘調査

平成29年度の調査

平成29年度は、昆布山谷地区と大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」と称す）内の金森家地点・豊栄神社地点の発掘調査を実施した。また、史跡地内・伝建地区内・世界遺産指定範囲内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘・立会調査を随時実施し、遺構・遺物の確認と記録を行った。

昆布山谷地区の発掘調査は、平成22（2010）年から実施しており、平成29年度で８年目となる。平成29年度には、第５地点を対象として実施した。平成28年度の調査では、第５地点において選鉱に関連する可能性がある遺構の一部が検出されていたほか、江戸時代前半の遺構面上に大量のユリカスが廃棄されていることが確認されていた。さらに、調査区端では選鉱に関連する可能性のある遺構が検出されており、当該期において選鉱活動が行われていた可能性が想定されていた。第８地点の谷筋に設定したトレンチでは道路遺構及び、道路と平坦面を区画する石垣が検出され、町並みの様相が明らかとなってきていた。平成29年度は、第５地点の調査範囲を拡大して選鉱関連遺構全体の検出を図るとともに、遺構面上における活動内容の把握・確認をすることと、より古い時期の遺構を検出して昆布山谷における開発当初の様相を明らかとすることを目的として発掘調査を実施した。また、第５地点東側の道筋にトレ

ンチを設定して石垣や道路遺構の検出を行った。昆布山谷地区の発掘調査にあたっては９月４日～16日にかけて、島根大学考古学研究室と共同で調査を行った。

大森伝建地区内の金森家地点と豊栄神社地点では、保存修理事業に先立つ発掘調査を実施した。金森家地点では主屋床下、豊栄神社地点では拝殿床下をそれぞれ対象とした。金森家地点では、現在の建物に関連する遺構としては、主屋基礎の据付け痕や、工事着工前の地鎮に関連する遺構が検出された。また、前身建物に関連する遺構として、礎石が複数検出された。豊栄神社地点では拝殿基礎の堆積状況が確認でき、建築にあたっての地業が明らかとなった。

試掘調査は伝建地区の福石家地点と林家地点の２カ所で、立会調査は伝建地区で３カ所、史跡地内で２カ所実施した。

平成29年度の調査に関連して、10月25日に大橋泰夫氏（島根大学教授）から昆布山谷地区発掘調査地現地にて、調査成果の検証や今後の調査方針などに関する指導を頂いた。また、小野正敏氏（当時：国立歴史民俗博物館教授）からは、１月29日～31日にかけて、石見銀山遺跡のこれまでの発掘調査で出土した陶磁器類の、時期及び産地について指導を頂いた。

公開事業としては、速報展と現地説明会を開催した。速報展は直近の発掘調査成果を公表するもので、６月28日～８月28日にかけて石見銀山世界遺産センターで開催した。現地説明会は12月10日に、昆布山谷地区で開催した。いずれも多くの見学者があった。

平成30年度の調査

平成30年度は、新たに着手した仙ノ山地区と、大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区（以下、「伝建地区」と称す）内の金森家地点の発掘調査を実施した。平成29年度と同様、史跡地内・伝建地区内・世界遺産指定範囲内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘・立会調査を随時実施し、遺構・遺物の確認と記録を行った。

仙ノ山地区の発掘調査は、長期計画に基づき着手した。仙ノ山の北側に広がる平坦面と、仙ノ山の尾根上に広がる平坦面にトレンチを設定した。平坦面に設定したトレンチでは、町並みの一部とみられる遺構が検出されたほか、岩盤を垂直に加工している様相が確認できた。また、平坦面上でもやや高い個所では方形状の石組遺構が検出された。尾根上に設定したトレンチでは、尾根の一部を人為的に加工して段を設けている様子が確認できたものの、明確な遺構は検出されなかった。仙ノ地区の発掘調査にあたっては９月３日～14日にかけて、島根大学考古学研究室と共同で調査を行った。

大森伝建地区内の金森家地点では、保存修理事業に先立ち、主屋西部の土間面の発掘調査を実施した。発掘調査によって、主屋東部の土間からは釜場跡（SX01）が、主屋東側の勝手口からは石敷遺構（SX02）がそれぞれ検出された。SX01は半地下式で、２基が連結していた。それぞれの釜からは煙道が伸び、屋外へとつながっていたほか、埋土からは陶製煙突の破片が出土した。SX01は検出状況及び金森家の来歴より、酒造に関連する遺構で、洗った米を蒸しあげる「蒸米」に関連する遺構と判断された。SX02は、敷石をわずかに傾斜させて配置し、北西隅の排水溝に水を集める構造となっていることから、酒造の工程の一つである「洗米」を行なうための洗い場とみられる。また、調査終了後に実施した試掘調査では、敷地の西部より、かつての敷地境とみられる石垣の一部が検出された。

立会調査は伝建地区で４カ所、史跡地内で３カ所実施した。

平成30年度の調査に関連して、６月29日・11月15日に大橋泰夫氏（島根大学教授）、９月６日に中井均氏（滋賀県立大学教授）より、仙ノ山地区発掘調査地現地にて、調査成果の検証や今後の調査方針などに関する指導を頂いた。

公開事業としては、ミニ展示と現地説明会を開催した。ミニ展示は平成22年度から平成29年度にかけて実施した昆布山谷地区の発掘調査の成果を公表するもので、10月19日より、石見銀山世界遺産センター情報コーナーで開催している。現地説明会は６月９

日に、金森家地点で、建物の保存修理事業現場公開と併せて開催した。　（大田市：山手）

仙ノ山地点第１トレンチ終了状況

（２）石造物調査

石見銀山遺跡の歴史的過程を石造物という観察対象を通して明らかにし、鉱山遺跡としての特性を把握することを目的に実施している。石造物には様々なものがあるが、現在は鉱山の衰退が直接的に繁栄されると考えられる墓石を重点的に調査している。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。

平成29年度は、27年度からの継続調査である昆布山谷西側の丘陵上で石造物が密集する妙本寺上墓地のB、C、F、H地点の悉皆調査とD地点の地形測量調査を行った。平成30年度は妙本寺上墓地の北西に位置する龍源寺間歩栃畑谷側出口上までの丘陵尾根上や斜面に石造物が存在する龍源寺間歩上墓地の悉皆調査を実施している。

妙本寺上墓地の概要と既往の調査

昆布山谷は銀山六谷の一つで、仙ノ山山頂から北西の方向に位置している南北方向に延びる長さ600mの谷で、佐毘売山神社の西麓で栃畑谷と合流している。この谷は天文年間から明治期まで様々な史料に登場する谷でもある。大田市教育委員会の分布調査や発掘調査では、近世前半から明治期に至るまでの遺構、遺物が確認されていることから、16世紀から明治時代にかけて鉱業活動や集落形成がなされたと考えられ、石見銀山の開発初期から隆盛・衰退、近代の再開発までの歴史を知る上で重要な地区といえる。

妙本寺上墓地は昆布山谷と栃畑谷が合流するすぐ上の丘陵に営まれており、昆布山谷地区の墓地の中では最も広く、石造物の多い墓地である。墓石は丘陵上に万遍なく分布するのではなく、尾根上や斜面中腹に形成された平坦面に多く存在している。ある程度まとまりの見られる部分もあり、そこをA～H地点の８箇所に分けている。

平成10年度の踏査で約330基の石造物が確認され、慶長（1596～1614）年間以前の墓石が多数存在することで注目された。平成13年度の分布調査では、一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、角塔、無縫塔など総概数で500基近い石造物が確認されている。

平成27年度はE・G地点の調査を実施した。E地点では一石宝篋印塔42基、一石五輪塔12基、組合せ宝篋印塔35基以上、無縫塔２基、方柱型墓標11基、地蔵２基を確認している。G地点では一石宝篋印塔１基、二石宝篋印塔１基、一石五輪塔11基、組合せ宝篋印塔４基以上、組合せ五輪塔１基、無縫塔11基、方柱形墓標82基、地蔵14基等が確認されている。

平成28年度はA地点の調査を行い、一石宝篋印塔23基、一石五輪塔15基、組合せ宝篋印塔11基以上、組合せ五輪塔１基、無縫塔９基、光背形墓標２基を確認した。18世紀代に一般的になる墓標類が確認されず、墓塔類で構成された墓地であることを特徴としている。

平成29年度調査

妙本寺上墓地のＢ、Ｃ、Ｆ、Ｈ地点の悉皆調査と寺院跡の可能性のあるＤ地点の地形測量調査を実施した。

悉皆調査を行った４地点は昆布山谷の西に位置する丘陵の尾根上及び北側丘陵先端付近に存在する。Ｂ・Ｃ地点は尾根上の緩斜面及び平坦面に形成されており、Ｂ地点の標高は281～283m、Ｃ地点は276～279mを測る。Ｆ・Ｈ地点は丘陵先端付近に位置し、標高254～263mの緩斜面に形成されている。測量調査のみのＤ地点は標高267～268mの平坦面に形成された比較的新しい墓地の様相を示している。

石塔の種類では、一石宝篋印塔37基、一石五輪塔31基、組合せ宝篋印塔24基、無縫塔４基、地蔵14基、円頂方柱型墓標等195基の総数305基の墓石が確認されている。地点数でみるとＣ地点が169基と一番多く、Ｆ地点68基、Ｈ地点54基、Ｂ地点14基の順となる。また、組合せ五輪塔が確認されなかったことが一つの特徴といえる。

墓石のうち古い紀年銘のものは天正18（1590）年の一石五輪塔２基（Ｂ、Ｃ地点で各１基）、これに続き文禄年間２基、慶長年間10基、元和年間９基、寛永年間７基、寛文年間１基、明和年間１基があり、最も新しい年号のものは天保２（1831）年の無縫塔１基であった。

宗派を示すものとしては、「譽号」や「釋」、「妙法」などが認められ、各宗派の墓石が混在している様子が窺える。

妙本寺上墓地の悉皆調査は平成27年度から３年間実施されている。その中で28年度調査Ａ地点の天正13（1585）年の一石五輪塔が最も古く、次いで今回調査を行ったＢ、Ｃ地点から天正18（1590）年の一石五輪塔が各１基ずつ見つかっている。27年度のＥ地点では慶長４（1599）年の一石宝篋印塔も見つかっていることから、妙本寺上墓地は、当地域の墓地の形成を考える上で重要な地点であることが推測される。

平成30年度調査

龍源寺間歩上墓地は妙本寺上墓地の北西側に位置する丘陵先端部に所在し、龍源寺間歩栃畑谷側出口上までの尾根や斜面と栃畑谷側平坦面を範囲としている。分布調査時には16のブロックに分けられ、200基以上の墓石が点在して確認されている。今年度はこのうちＡ～Ｌの12地点の調査を行うことにしたが、全てを完了することはできず、残り箇所については31年度の調査として継続することにした。

調査地点は標高235～270mに位置し、尾根上から斜面にかけて墓石等が点在していることから、原位置もしくは原位置に近いものと転落したものが混在している状況といえる。

今回の調査では、一石宝篋印塔61基、一石五輪塔31基、組合せ宝篋印塔35基、組合せ五輪塔３基、無縫塔６基、題目塔１基、地蔵７基、円頂方柱型墓標等83基の総数227基の墓石が確認され、このうち実測87基、銘文調査92基の計179基の調査を行った。このうち特異なものとして、地蔵のレリーフが施された宝篋印塔もしくは供養塔の基礎が確認されている。

墓石が最も多く確認されたのは南側斜面中腹に造成された平坦面のＢ地点であるが、総数92基のうち68基が円頂方柱形墓標であり、墓標を中心とする墓地の様相を呈していた。

古い紀年銘の墓石としては現状ではＢ地点の天正19（1591）年の一石五輪塔１基が一番古く、次いで慶長年間２基、元和年間３基、寛永年間２基などの順となる。最も新しい年号のものはＢ地点で確認された天保４（1833）年の無縫塔１基であった。

尾根上には４～５箇所の基壇が確認されていることから、ここに有力者の墓が築かれていたことが推測される。また、その周辺には組合せ宝篋印塔、五輪塔などの石塔が多数確認されており、本来は尾根上に密集して造墓されていたと考えられ、斜面や平坦面に存在する石塔は尾根から転落したものと推測される。上述したＢ地点では龍源寺間歩上墓地の中では一番古い紀年銘をもつ一石五輪塔が確認されているが、これも尾根上から転落したものの可能性

が高いと考えている。

龍源寺間歩上墓地の調査は次年度も継続して行う予定であり、墓域全体の詳細については次年度以降掲載したい。なお、妙本寺上墓地B、C、D、F、Hの詳細については、下記報告書に掲載している。

『石見銀山遺跡石造物調査報告書18－昆布山谷地区　妙本寺上墓地B、C、D、F、H地点の石造物調査－』　（島根県：今岡）

（3）文献調査

これまで文献調査においては、以下の4点を研究目的として調査研究と、石見銀山に関する文献史料の収集を進めてきた。

・石見銀山の支配・社会・技術・経済について解明をめざす。
・鉱山の比較研究へ向けて国内外鉱山史料の調査・収集を行う。
・石見銀の国内流通（日本海水運等）、銀を介した対外貿易の情報を収集する。
・周辺地域・17世紀以降を含め悉皆的に史料の所在を明らかにする。

【文献調査実施状況】

大森町域または銀山料内に所在する商家・銀山師・地役人家に残された史料、また県外にて関係史料の調査を行った。平成29～30年度にかけての主な文献調査の実施状況は次のとおりである（史料名、所在地、調査期間）。

①熊谷家文書（大田市教育委員会寄託、通年）
②山中家文書（同上、通年）
③竹下家文書（同上、通年）
④高橋家文書（石見銀山資料館寄託、通年）
⑤石田家文書（大田市教育委員会所蔵、通年）
⑥泉家文書（大田市仁摩町、平成29年8月23～26日、平成30年3月21～22日、8月23～24日、平成31年3月26～27日）
⑦山口県文書館所蔵文書（山口県山口市、平成30年3月14～16日）
⑧島根県立古代出雲歴史博物館所蔵文書（島根県出雲市、平成30年7～10月）
⑨金森家下張り文書（大田市大森町、平成30年9～10月）
⑩物部神社文書（大田市川合町、平成30年11月2・14日）

【主な文献調査の概要】

平成29～30年度にかけて実施した文献調査の主な概要は次のとおりである。

①熊谷家文書は、大森町に所在し、石見銀山附御料内で最も有力な商家である熊谷家の伝来文書。同家文書・同家下張り文書には代官所伝来の史料群と家職関係史料を中心とした膨大な点数が残され、数年にわたり継続して調査を行っている。依然として未整理分が残されており、目録の作成や撮影を実施中である。

②山中家文書は、石見銀山の代官所地役人を務めた家に伝わる文書群。地役人の身分や俸禄、勤向あるいは諸家の由緒に関わる史料が数多く含まれている。大田市教育委員会（石見銀山世界遺産センター保管）に寄託されている史料群の目録作成と写真撮影を実施した。なお、いずれの作業も平成29年度中に完了した。

③竹下家文書は、久手浦（現大田市久手町）での廻船業を中心とする多角経営で栄えた家の伝来文書。史料群54の目録作成を実施、平成29年度中に完了した。内容としては近世の土地証文が大半であり、竹下家の土地集積状況などをうかがい知ることができる史料群である。

④高橋家文書は、銀山町で山師・山組頭、町年寄をつとめた家の伝来文書。現在は石見銀山資料館に寄託されており、以前史料調査を実施したが、未調査分が残されていた。目録作成については平成29年度中に完了した。

⑤石田家文書は、石田家は石見銀山料波積本郷（現江津市波積町本郷）の庄屋をつとめた家の伝来文書である。大田市教育委員会が所蔵している史料（石見銀山世界遺産センター管理）の目録を作成した。また、あわせて写真撮影も実施し、いずれの作業も完了した。

⑥泉家文書は、宅野浦（現大田市仁摩町宅野）において廻船業を営んだ商家に伝来した文書。廻船業の諸帳簿、商品売買の仕切状、金銀貸借関係証文類が史料群の中核をなす。毎年３月と８月に現地で史料調査を実施しており、調査は継続中である。

⑦の山口県文書館には石見銀山関係の文書が多く含まれており、これまでも度々調査を実施してきた。平成29年度は、中世史料の写しである『五国証文』、近世・近代文書については鉱山関係史料をはじめとして大森町の長安寺に関する訴訟などの記録、長州戦争時の諸記録、石見銀山周辺の絵図類などを撮影した。

⑧の島根県立古代出雲歴史博物館は毎年石見国関係の文書を購入しており、その中には銀山料内の文書も含まれている。平成30年度は、石見銀山附地役人の松浦家文書をはじめとして銀山料内の関係文書を調査した。とりわけ邇摩郡波積南村の嘉戸家旧蔵文書（複数の文書群に分散して存在）については、これまで未確認の中世史料写しが収められているなど、新たな知見を得ることができた。

⑨の金森家は大田市大森町に所在。同家に伝来した襖などの下張り文書を調査した。近世後期以降の酒造業者の帳簿のほか、とりわけ注目されるのが17世紀の文書を多く含む点である。寛永年間と推測される日和村庄屋の「鉄送り証文」には２代石見銀山奉行の「竹村丹後」の手形によって温泉津へ鉄を輸送する旨が記されているほか、17世紀後半の借銀証文や銀山料内の有力者の書状類（川本谷戸の小笠原氏、温泉津老中の高津屋など）といった興味深い史料が多い。今後の調査分析が期待される。

⑩の物部神社は大田市川合町に所在する石見国一宮。平成30年度は、旧筆頭社家の金子氏が所蔵していた文書を調査した。近世以降の竪帳類が主で、点数は50点前後。一部に中世文書を含む。これまで写本のみ知られていた古文書の原本２点を確認したほか、天正14（1586）年の年次を持つ新出文書も１点確認した。近世史料について徳川将軍から社家宛てに発給された朱印状の写し、朱印状発給の来歴に関する記録、17世紀後半の金子氏の江戸滞在日記、文化13（1816）年の国造小日記、社家役人の道中記など。石見銀山代官所関係者、大森町人等との関係が見える史料も存在しており、注目される。

【文献調査指導会の開催】

文献調査を実施するにあたり、有識者から調査指導の助言を受けた。平成29年度は８月22日、12月17日の２回、平成30年度は６月30日、12月16日の２回実施した。いずれも開催場所は島根県立古代出雲歴史博物館である。

【文献調査報告書の刊行】

毎年文献調査の成果として報告書を刊行している。概要は次のとおり。

平成29年度は、近世の石見銀山において山師・山組頭、銀山町の年寄をつとめた高橋家に伝来した「銀山覚書」（石見銀山資料館寄託）を翻刻し、『石見銀山歴史文献調査報告書13銀山師高橋家蔵銀山覚書』として刊行した。当該史料には近世の石見銀山及び銀山料に関する基本的情報が掲載されており、鉱山経営や銀山料内の様相を知るうえでの基本史料となっている。

平成30年度は、島根県立古代出雲歴史博物館が所蔵する松浦家文書の史料目録を『石見銀山歴史文献調査報告書14石見銀山附地役人松浦家文書』として刊行した。本書にて取り上げた松浦家文書は、近世の石見銀山料大森代官所において地役人（同心）をつとめた家に伝来した文書群である。なお、本書にはとりわけ重要と思われる中近世史料の写しを紹介し、一部の史料については写真もあわせて掲載した。

（島根県：伊藤大貴）

（４）科学調査

石見銀山遺跡の実態を自然科学的な手法で解明する調査を行っている。

平成29年度は、大田市教育委員会が実施した昆布山谷地区第５地点において精錬関係遺構（SX28）が確認されたため、奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長の鳥越俊行氏に分析方法等の現地指導を受け、試料のサンプリングを行った。

平成30年度は29年度にサンプリングを行った試料

の灰層、ユリカス、ズリ、カラミについて、精錬の目的鉱物や作業工程を推定する手がかりを得るため、X線CT、蛍光X線分析、顕微鏡観察を実施した。X線CTについては奈良国立博物館、その他は島根県埋蔵文化財調査センターで実施している。

なお、分析結果については、以下の報告書に掲載している。

『石見銀山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』

（島根県：今岡）

（5）地図・地名、人権・同和問題調査

石見銀山遺跡の調査研究においても、近世の身分制度や現在の人権・同和問題を充分に理解し、歴史的事実の解明によって、これら諸問題の解決を目指さなくてはならない。本事業では、調査研究に加えて研修会と先進地における関連施設の視察を実施している。

平成29年度は、10月27日に京都学園大学人文学部教授の平雅行氏をお招きして、「日本仏教と差別―差別を肯定する思想と否定する思想―」と題して講演を行った。講演では日本の中世社会を題材に中世における身分制社会、奴隷、病人、被差別民の問題についての具体的な実態を当時の宗教者（僧侶）の動きと絡めつつ説明された。とりわけ日本の中世社会を語るうえで重要な存在である仏教と差別の関係性について、興味深いお話をいただき理解を深めた。

また、先進地視察としては平成30年２月26日に鳥取県倉吉市を訪れた。倉吉市の担当職員の案内により、同市内の同和地区のフィールドワークを実施。その後、倉吉市やまびこ人権センターにて倉吉市の担当者との間で意見交換を行った。質疑応答では倉吉市内の同和地区の現状、人権同和問題への取り組み、歴史文献史料の取り扱い状況などの説明を受けた。その際、鳥取藩と松江藩・石見銀山料における差別状況の違いが明らかになるなど、山陰地方内部での地域的な差異を比較検討する必要性を確認した。

平成30年度は、11月27日に石見銀山資料館長の仲野義文氏をお招きして、「江戸時代の身分と社会―石見銀山の事例から―」と題して講演を行った。講演では石見銀山料内の事例を素材に江戸時代の社会と身分の問題について説明された。特に身分の移動や売買、武士の周縁としての石見銀山附地役人の存在形態、銀山料内の被差別民の実態といった内容は、石見銀山の歴史を知るうえで重要な手がかりとなるだけでなく、前近代社会の身分と差別問題について理解を深める良い機会となった。

（島根県：伊藤大貴）

（6）教育普及方法等調査

石見銀山遺跡の歴史的・文化的価値の情報発信を効果的に行うため、全国各地の教育普及施設や関連イベントについて視察・参加している。

平成29年度は東京都中央区の日本銀行金融研究所貨幣博物館、同千代田区の国立公文書館を視察した。貨幣博物館では貨幣の歴史についての展示を見学し、石見銀山産出の銀や古丁銀をはじめとした前近代貨幣の展示状況を学び、今後の展示手法の参考とした。また、国立公文書館では同館の所蔵・管理する公文書や古文書の閲覧を通じて、公文書の管理方法を視察したほか、同館で実施されている企画展を見学した。

平成30年度は京都府立京都学・歴彩館、大阪市の造幣博物館、大阪大学総合学術博物館を視察した。京都府立京都学・歴彩館では、京都府が所蔵・寄託する行政文書・古文書などの取り扱い・閲覧状況を視察。同館が進めるデジタルアーカイブの内容も今後の情報発信の在り方を考えるうえで参考となった。また、造幣博物館・大阪大学総合学術博物館では貨幣や鉱物の展示方法を見学した。とりわけ造幣博物館において見学した、透明なアクリルパネルに貨幣をはめ込む形での展示方法は展示品を表裏全面から見学することが可能であり、注目される。従来のガラスケースに平置きする形とは異なる方法であり、石見銀山世界遺産センターにおいても新しい展示手法として参考になり得るだろう。

（島根県：伊藤大貴）

（７）生物環境調査

石見銀山遺跡は「石見銀山遺跡とその文化的景観」という名称で世界遺産に登録されているように、かつての鉱山経営の痕跡が自然景観と一体となって残っている点が高く評価されている。このため、平成18・19年度に相関植生図の作成、生物相調査を実施し、代表的な自然環境相を有する地点・地域の把握を行った。その結果を受け、平成20年度からその年次変化を把握するための定期的な調査（モニタリング）を実施している。

生物相調査では、銀山川流域、山吹城跡登山道、金生坑～釜屋間歩、鞆ヶ浦、沖泊、石見銀山街道の各地区の中で、必要な箇所をそれぞれ選定して踏査を実施し、確認された生物種や周辺の植生状況などを記録して自然環境の概略を把握した。調査方法は、踏査ルートを歩きながら生物相の記録を行い、コウモリ等の特定の生物相が見込まれる地点でその確認調査を実施した。生物相の記録は、短期的な影響が出やすい移動性の低い生物を中心とし、中・大型哺乳類や鳥類は適宜記録した。

上記の結果を踏まえ、対象地域の主要箇所から今後のモニタリング調査に適した箇所と項目を絞り込むとともに、継続的に実施可能な手法を検討した。それを受けて銀山川遊歩道、山吹城登山道、本谷地区、鞆ヶ浦港、沖泊港について年２回（春・秋）の踏査を行い、指標種として設定した動植物の有無を確認するとともに、生物環境の概要を記録した。また、大久保間歩、矢滝城跡、石見城跡において、特定動植物（コウモリ類、洞窟性昆虫類、ギフチョウ、ラン類など）の調査を行い、生息状況を記録した。

現在までのところ、世界遺産登録以後の見学者の増加による、生物環境の大きな変化は見られないが、今後も継続的に調査を実施していく予定である。

調査については公益財団法人しまね自然と環境財団に委託して実施しており、大久保間歩のコウモリ調査の成果の一部について、本年報Ⅲの石見銀山遺跡関連調査研究で報告している。（島根県：今岡）

（８）資産保全調査

石見銀山遺跡に多く所在する石造物等について、劣化・損傷の原因を究明し、今後の適切な保存方法を検討するために実施している調査である。

平成29・30年度は継続調査として、龍昌寺に所在する、代官浅岡彦四郎墓と川崎平右衛門墓、豊栄神社石造物（水桶・灯籠）について劣化・損傷状況の経過観察を行った。また、石造物の保存環境のデータを得るため、浅岡彦四郎墓で温湿度記録計等を設置し、周辺の温湿度と石材の表面温度の変化を観察している。

平成30年度には福光石の劣化・損傷原因を特定するために、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の高妻洋成氏、脇谷宗一郎氏の指導を受けて、石材のプレパラートの作成や鉱物組成の確認、塩の有無についての分析調査を実施している。

（島根県：今岡）

３．テーマ別調査研究事業

（１）経緯

島根県教育委員会では、石見銀山遺跡の価値をより高めるために、世界遺産登録前から行っている基礎調査研究に加えて、平成20年度からテーマを絞った調査研究をスタートさせた。

第１期のテーマ選定にあたっては、長年にわたって行われた発掘調査の成果や石造物悉皆調査などの成果から石見銀山遺跡の最盛期の広がりを推定し、景観復元を主要なテーマとして「最盛期石見銀山の復元」を掲げた。

また、もう一つのテーマとして、世界遺産登録時の付帯事項としてユネスコから比較研究を要請されていることから、石見銀山と国内外の諸鉱山との関係解明を目的とした「東アジアの鉱山比較研究」をテーマに設定した。テーマ別調査研究は、考古学、文献史学をはじめ歴史地理学や鉱床・地質学など関係諸科学の研究者を客員研究員に委嘱し、島根県教育委員会・大田市教育委員会との共同研究として開始した。

この調査研究は１期を概ね３年間とし、平成22年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書１』を刊行した。しかしながら、計画していた報告の一部が集録できず、またわずか３年間の調査研究だけでは最盛期石見銀山の復元は困難であったため、計画していた再現イラストの作成を見送り、計画を変更して第２期も同テーマを継続していくことになった。

第２期は平成23年度から３年間にわたり銀の流通とその拠点をテーマに街道と港・港町を対象に調査研究を行った。平成27年度までに成果の集約を行い、平成28年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書２』として刊行されている。なお、第１期で掲載できなかったものについても同報告書で公表している。

「東アジアの鉱山比較」についても調査研究を同時に進め、上記報告書で公表しているが、平成25年度から３年間で実施した台湾鉱山との比較研究については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書３』として平成28年度に刊行されている。この鉱山比較についても３年間周期で終了するべき研究テーマとは言いがたく、今後も継続して調査研究を行っていくことにしている。

平成26年度からは「石見銀山鉱山町の変遷」をテーマとして第３期の研究に着手し、その成果については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書４』として公表している。

なお、本テーマ別調査研究の成果は、正式報告はもちろんのこと、本誌『調査研究』でも掲載し、随時公表することとしている。

本テーマ別調査研究にかかる客員研究員は以下のとおりである。

「石見銀山鉱山町の変遷」

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課長代理）

中野茂夫（島根大学教授）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

藤原雄高（石見銀山資料館学芸員）

西尾克己（松江市史松江城部会長）

鳥越俊行（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長）

「東アジア鉱山比較研究」

眞鍋周三（兵庫県立大学名誉教授）

佐治奈通子（東京大学大学院）

津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部長）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

（２）最盛期石見銀山の復元研究

第３期のテーマ研究を進めるにあたり、第２期までの客員研究員主体に進める研究方法から県・市職員が研究を担う体制に改めることとなった。第３期のテーマは石見銀山の鉱山町を形成する大森町・銀山町の変遷と画期を明らかにするため「石見銀山鉱山町の変遷」を取り上げ、考古、建造物、文献の各分野で研究を進めることとした。

本テーマの研究開始にあたり、平成26年８月５日に第１回客員共同検討会を開催し、各分野でテーマに関連する課題について担当者及び客員研究員による勉強会を開催することとなった。平成26年度は５回、平成27年度に３回開催している。

平成27年度末には客員共同検討会を開催し、２年間の研究を総括し次年度以降の成果のとりまとめ方について検討を行った。平成28・29年度は各分野で調査・研究の深化に努めた。

平成30年度には報告書刊行に向けて月１回程度それぞれの分野で検討会を行い、平成30年11月９日に客員共同検討会を開催して報告書の内容や構成等の意見交換を行い、平成30年度末に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書４』として刊行されることになった。

（３）東アジア鉱山の比較研究

当事業は、石見銀山遺跡の特色を明らかにするために、東アジアに所在する各鉱山との比較研究を行うものである。研究の枠組みとして、島根県内の鉱山、日本国内の鉱山、東アジアの鉱山の３段階に区分して調査研究を行っている。

平成29年度からの東アジア鉱山比較研究では、東アジアに限定せず、同時代の世界各地の鉱山につい

て国内の研究者から情報を収集し、石見銀山との比較が可能な研究項目の抽出を行って比較研究を進めることにした。

平成30年３月20日に第１回の比較検討会を開催し、比較研究項目の抽出を行った。これに基づき、国内外の鉱山運営体制について検討するため、平成30年６月19日に第２回比較検討会を開催した。31年３月27日には税・労働者をテーマとして第３回検討会を開催したところである。次年度以降も石見銀山の特徴をより明らかにするため比較可能な同時代鉱山の情報収集を行うこととしている。

また、石見銀山の歴史についてはこれまで近世以前を中心に研究が進められてきたが、東アジア鉱山の比較研究を進める上で近代の開発状況についても把握する必要性が客員共同検討会の席上で示された。これを受けて石見銀山の近代開発の歴史を知るために、藤田組が開発を行った際に作成した官公庁宛て文書の控えを綴った「要書録」の翻刻を行うこととなった。この史料は明治末～大正期に藤田組の大森鉱山開発に携わった上野家に伝来したもので、明治19年から始まる藤田組による開発状況を示す貴重な史料である。

史料の翻刻は、世界遺産センター勤務の県市職員で分担して行い、平成29年度に『石見銀山近代史料集』第３巻、平成30年度に第４巻を刊行した。

（島根県：今岡・伊藤徳広）

４．調査専門委員会・調査整備活用委員会の開催

世界遺産に登録された平成19年度以降、平成25年度までは「調査活用委員会」の中で学術的調査や整備・活用のあり方などについて各分野の専門家から指導助言を受けてきた。

しかしながら、世界遺産登録後は遺跡の整備や活用、来訪者対策など様々な課題への対応が求められるようになり、１つの委員会で調査や保存管理を中心とした視点だけでなく、保存・活用など多岐にわたる課題を取り扱うには十分とはいえない状況となった。そこで、従前の「調査活用委員会」を、調査研究に関わる専門的な課題や方向性について協議する「調査専門委員会」と、調査研究に関する包括的な指導・助言、遺跡の保存管理及び整備活用に関する包括的な指導・助言を受ける「調査整備活用委員会」の２つに再編成することとした。

各委員会の構成は以下のとおりである。

〈調査専門委員会〉

井上　雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課長代理）
大橋　泰夫（島根大学法文学部教授）
岡　美穂子（東京大学史料編纂所准教授）
黒田　乃生（筑波大学大学院教授）
高妻　洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）
佐々木　愛（島根大学法文学部教授）
田辺　征夫（大阪府文化財センター理事長）
津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部長）
中西　哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野　義文（石見銀山資料館館長）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校教授）
松村　恵司（奈良文化財研究所所長）
山村　亜希（京都大学大学院准教授）

〈調査整備活用委員会〉

太田　洋子（熊谷家住宅　家の女たち代表）
川口　　純（DOWA ホールディングス（株）執行役員）平成30年度より
黒田　乃生（筑波大学大学院教授）
高安　克己（島根大学名誉教授）
田中　哲雄（元東北芸術工科大学教授）
田辺　征夫（大阪府文化財センター理事）
玉串　和代（しまね国際センター理事）
内藤ユミイザベル（日本イコモス国内委員会理事）
中塩　　弘（DOWA ホールディングス（株）取締役）平成29年度まで
仲野　義文（石見銀山資料館館長）
中村　俊郎（中村ブレイス（株）代表取締役会長）
村田　信夫（OFFICE　萬瑠夢）
和上　豊子（元石見銀山ガイドの会会長）

平成29年度

（１）第４回調査整備活用委員会

平成30年２月28日（水）に石見銀山世界遺産センターで開催した。出席委員は太田洋子、黒田乃生、高安克己、田辺征夫、玉串和代、内藤ユミイザベル、仲野義文、中村俊郎、村田信夫、和上豊子の10名であった。このほかオブザーバーとして文化庁記念物課世界文化遺産室から渡辺栄二室長が出席した。

委員会では最初に文化庁から世界遺産をめぐる近年の状況に関する報告をいただいた。次に平成29年度に実施した世界遺産登録10周年記念事業の報告を行った。「登録10周年のあゆみ」の映像を視聴しながらこれまでの取り組みについて紹介した後、登録記念日の記念式典や世界遺産サミット開催状況、古代出雲歴史博物館及び石見銀山資料館の２館同時開催の展覧会である「石見銀山展－銀が世界を変えた」についての報告と石見銀山の観光動態について報告がなされた。

その後、「登録10年とこれからの石見銀山遺跡」を協議事項として、第３回の委員会で出された意見・課題等についての対応状況、情報発信や港湾集落の現状と課題について活発な意見交換が行われた。

委員会前日の27日（火）には昆布山谷地区の発掘調査及び佐毘売山神社を視察した。

平成30年度

（１）第４回調査専門委員会

平成30年８月10日（金）に石見銀山世界遺産センターで開催した。出席委員は井上雅仁、大橋泰夫、黒田乃生、高妻洋成、佐々木愛、田辺征夫、津村眞輝子、仲野義文、原田洋一郎の９名であった。

委員会では総合調査研究事業の実施状況と当該年度の計画である①基礎研究、②テーマ別研究について報告と意見交換が行われた。また、遺跡保存管理及び建造物修理事業の報告のほかに、平成30年４月９日に起きた大田市東部を震源とする島根県西部地震による石見銀山遺跡の被害状況とその対応についての報告、平成29年度に実施された世界遺産登録10周年記念事業の報告も行っている。

なお、前日の９日（木）には仙ノ山及び佐毘売山神社の発掘調査の状況を視察した。

（２）第５回調査整備活用委員会

平成31年２月１日（金）に石見銀山世界遺産センターで開催した。出席委員は太田洋子、川口純、高安克己、田中哲雄、田辺征夫、玉串和代、内藤ユミイザベル、仲野義文、中村俊郎、和上豊子の10名であった。このほかオブザーバーとして文化庁文化資源活用課文化遺産国際協力室から下田一太調査官が出席した。

委員会では最初に文化庁から世界遺産をめぐる近年の状況に関する報告をいただいた。次に震災による石見銀山遺跡の被害状況とその対応状況、石見銀山発見年について、総合調査研究事業、遺跡整備及び建造物修理事業、石見銀山遺跡の観光動態の５本の報告を行った。銀山発見年については、近年の調査研究の成果により従来の1526年説から1527年説が有力であることを報告したところである。

上記報告には多くの課題が内包されるが、このうち港湾集落の空き家対策とインバウンド対策を中心にして活発な意見交換が行われた。

前日の１月31日（木）には宗岡家・金森家住宅及び大森保育園を視察している。（島根県：今岡）

５．調査研究成果の公表

島根県と大田市では講座や講演会を開催して、調査研究の公表を行っている。

（１）島根県

島根県では大田市を除く県内及び島根県外に向けた情報発信として石見銀山遺跡関連講座を実施した。実施状況は以下のとおりである。

平成29年度

［飯南町］

１）日　時　平成30年３月３日（土）
　　13：30～16：00

２）場　所　赤名農村環境改善センター
　　（島根県飯石郡飯南町下赤名）

３）テーマ　「江戸時代の陰陽を結ぶ石見銀山街道」
　　講演「石見銀山街道の歴史」

藤原雄高氏（石見銀山資料館学芸員）
報告「三郷町の街道」
岩谷知広氏（三郷町教育委員会）
「飯南町の街道」
関島哲郎氏（飯南町教育委員会）
「三次市の街道」
友廣美和氏（三次市教育委員会）
４）参加人数　50名

［東京都］
１）日　時　平成30年３月24日（土）
13：00～15：40
２）場　所　時事通信ホール
（東京都中央区銀座）
３）テーマ「世界遺産・石見銀山と江戸のモノづくり」
講演「石見銀山遺跡とその文化的景観」
仲野義文氏（石見銀山資料館館長）
「鉱山から始まった江戸のモノづくり」
鈴木一義氏（国立科学博物館産業技術史資料情報センター長）
４）参加人数　244名

平成30年度

［益田市］
１）日　時　平成30年10月28日（日）
13：30～16：00
２）場　所　島根県芸術文化センターグラントワ
（島根県益田市有明町）
３）テーマ「中世石見国の繁栄～東アジアと日本海を舞台とする交易に迫る」
講演「石見銀山の開発と中世西日本海地域の交易」
目次謙一氏
（島根県古代文化センター専門研究員）
報告「港湾遺跡から見た日本海交易～15・16世紀を中心に」
佐伯昌俊氏
（益田市教育委員会文化財課主任主事）
４）参加人数　45名

［安来市］
１）日　時　平成31年２月９日（土）
13：30～16：00
２）場　所　安来市和鋼博物館
（島根県安来市安来町）
３）テーマ「奪い合う銀山！～石見銀山をめぐる争奪戦の歴史」
講演「石見銀山争奪戦」と戦国大名
伊藤大貴（世界遺産室研究員）
講演「石見銀山を取りまく山城－築城と改修の痕跡をさぐる－」
山根正明氏
（元松江市教育委員会史料編纂室専門官）
４）参加人数　110名

［広島市］
第１講
１）日　時　平成30年８月25日（土）
13：30～15：30
２）場　所　中国新聞ホール（広島市中区土橋町）
３）テーマ　「奪い合う石見銀山」
講演「石見銀山の開発とその時代」
仲野義文氏（石見銀山資料館館長）
４）参加人数　420名

第２講
１）日　時　平成30年９月９日（日）
13：30～15：30
２）場　所　中国新聞ホール（広島市中区土橋町）
３）テーマ　「奪い合う石見銀山」
講演「毛利氏と石見銀山」
長谷川博史氏（島根大学教育学部教授）
４）参加人数　345名

（２）大田市

大田市では石見銀山学講座「ここまでわかった石見銀山」を開催した。

平成29年度

１）日　時　平成29年７月１日（土）
10：00～16：30
２）場　所　島根県立男女共同参画センター

あすてらす（島根県大田市大田町）

3）講　演

「金・銀・銅の日本史－石見銀山と鉱山技術」

村上　隆氏（京都美術工芸大学副学長）

「幕藩制国家の成立と石見銀山」

仲野義文氏（石見銀山資料館館長）

4）報　告

「石見銀山の山内と柵列」

若槻真治氏（島根県芸術文化センター劇場館長）

「石見銀山の鉱床」

中村唯史氏（島根県立三瓶自然館課長代理）

「久喜・大林銀山遺跡の調査」

角矢永嗣氏

（島根県邑南町教育委員会調整監）

「温泉津の町並み－内藤家住宅の調査を通して」

内藤ユミイザベル氏

（日本イコモス国内委員会理事）

5）パネルディスカッション

「石見銀山遺跡とその文化的景観のこれから」

村上　隆、仲野義文、内藤ユミイザベル

6）参加人数　100名

平成30年度

1）日　時　平成30年10月27日（土）

13：00～16：00

2）場　所　サンレディー大田

（島根県大田市大田町）

3）講　演

「石見銀山と災害」

中村唯史氏(島根県立三瓶自然館学芸員)

4）報　告

「毛利氏の石見銀山支配と西田商人」

伊藤大貴（島根県文化財課世界遺産室）

「昆布山谷地区の発掘調査報告」

山手貴生（大田市石見銀山課）

「昆布山谷地区の生産関連遺構」

新川　隆（大田市石見銀山課）

「石見銀山ことはじめ１始読みどころ」

仲野義文氏（石見銀山資料館館長）

5）参加人数100名

1）日　時　平成31年２月11日（月）

13：30～16：00

2）場　所　サンレディー大田

（島根県大田市大田町）

3）講　演

『石見銀山学ことはじめⅡ水』読みどころ

藤原雄高氏（石見銀山資料館学芸員）

4）発　表

「トンネル工事に間歩掘削をみる」

高橋悟氏（東京農業大学名誉教授）

5）ワークショップ

「石見銀山人物伝」

6）参加人数80人

II

平成29・30年度の
石見銀山遺跡関連報告書・出版物

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 9

1．報告書等

・『石見銀山遺跡発掘調査概要26昆布山谷地区・金森家地点・豊栄神社地点』（大田市教育委員会、2018.3）
・『石見銀山歴史文献調査報告書13　銀山師高橋家蔵銀山覚書』（島根県教育委員会、2018.3）
・『平成28年度石見銀山遺跡関連講座記録集』（島根県教育委員会、2018.3）
・『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究８』（島根県・大田市両教育委員会、2018.3）
・『石見銀山近代史料集　第３集　要書録（３）石見銀山譲受約定証并関係契約書類』（島根県・大田市両教育委員会、2018.3）
・『石見銀山遺跡発掘調査報告書Ⅳ昆布山谷地区』（大田市教育委員会、2019.3）
・『金森家住宅修理工事報告書』（大田市教育委員会、2019.3）
・『石見銀山歴史文献調査報告書14　石見銀山附地役人松浦家文書目録』（島根県教育委員会、2019.3）
・『平成30年度石見銀山遺跡関連講座記録集』（島根県教育委員会、2019.3）
・『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究９』（島根県・大田市両教育委員会、2019.3）
・『石見銀山近代史料集　第４集　諸官省願伺届書綴藤田組規則類』（島根県・大田市両教育委員会、2019.3）
・『石見銀山遺跡石造物調査報告書18―昆布山谷地区　妙本寺上墓地Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｈ地点―』（島根県・大田市両教育委員会、2019.3）
・『石見銀山遺跡テーマ別研究調査報告書４』（島根県・大田市両教育委員会、2019.3）

2．関連論文

・高橋悟・仲野義文・藤原雄高「中世石見銀山銀積み出し港の地理的検討（島根地理学会設立70周年記念）」『島根地理学会誌』50（島根地理学会、2017.10）
・高橋悟・高橋宏道「石見銀山代官の災害への対応大田市久利町の水害を例として（島根地理学会設立70周年記念）」『島根地理学会誌』50（島根地理学会、2017.10）
・和田譲二「これからの竹資源管理に向けて（３）世界遺産石見銀山周辺での竹林景観整備」『山林』1601（大日本山林会、2017.10）
・鈴木俊幸「書籍文化史料片々（其之12）石見国医師の読書生活」『書物学』12（勉誠、2018.2）
・廣瀬文太郎「石見銀山における江戸時代の小規模な間歩の掘削に要した時間の検討」『古代文化研究』26（島根県古代文化センター、2018.3）
・川島芙美子「石見相聞化歌における「浦」と「潟」の考察　『万葉集』『出雲国風土記』『播磨国風土記』を中心に（特集山陰、山の陰の地名と風土）」『地名と風土　人間と大地を結ぶ情報誌』12（日本地名研究所、2018.3）
・岸田裕之「島根県立石見美術館企画展「石見の戦国武将」開催記念講演会・石見国巡回講座　石見国衆連合と大名たちの室町戦国時代史」『しまねの古代文化　古代文化記録集』25（島根県古代文化センター、2018.3）
・久留島典子「島根県立石見美術館企画展「石見の戦国武将」特別講演会・石見国巡回講座　益田家文書研究の可能性」『しまねの古代文化　古代文化記録集』25（島根県古代文化センター、2018.3）
・永井泰「大田市仁摩町石見八幡宮亀趺碑（きふひ）使用石材についての所見」『島根県地学会会誌』33（島根県地学会会誌編集委員会、2018.3）
・山﨑亮・錦織稔之「翻刻　藤井宗雄著『石見国神社記』巻四　那賀郡下（前編）」『古代文化研究』26（島根県古代文化センター、2018.3）
・倉恒康一・佐伯徳哉・中司健一・西田友広・本多博之・目次謙一「「石見肥塚家文書」中世分の翻刻と紹介」『東京大学史料編纂所研究紀要』28（東京大学史料編纂所、2018.3）
・倉恒康一「史料散歩石見国に伝わった中世鋳物師史料」『日本歴史』841（日本歴史学会、2018.6）
・伊藤大貴「応仁・文明の乱後における石見山名氏の動向」『地方史研究』68（５）（地方史研究協議

会、2018.10）
・中安恵一「歴史・民俗 明治前期における石見鉄山経営者と廻船」『知多半島の歴史と現在』22（日本福祉大学知多半島総合研究所、2018.10）

３．関連書籍

・鳥谷芳雄『石見銀山を読む　古図・絵巻・旧記・石州銀』（報光社、2017.4）
・浜野潔・井奥成彦・中村宗悦・岸田真・永江雅和・牛島利明『日本経済史1600－2015　歴史に読む現代』（慶應義塾大学出版会、2017.4）
・島根県立古代出雲歴史博物館・石見銀山資料館編『石見銀山展　IWAMI GINZAN Silver Mine　世界遺産登録10周年記念　銀が世界を変えた』（島根県立古代出雲歴史博物館、2017.7）
・『石見銀山学ことはじめ　Series１』（大田市教育委員会、2018.3）
・島根県古代文化センター編『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界（島根県古代文化センター研究論集　第18集）』（島根県教育委員会、2018.3）
・鳥谷芳雄『石見銀山を読む　古図・日記・旧記・絵巻・石州銀　続』（報光社、2018.6）
・『石見銀山学ことはじめ　Series２』（大田市教育委員会、2019.3）

４．その他（他鉱山）

・佐藤壽修『西沢金山の盛衰と足尾銅山・渡良瀬遊水地』（随想舎、2017.9）
・青木美香・井澤英二・久間英樹「文化財レポート多田銀銅山遺跡」『日本歴史』832（日本歴史学会、2017.9）
・久間英樹・福岡久雄・森内敦史「湯之奥中山金山の坑道掘跡および露天掘跡の採掘体積算出手法」『技術史教育学会誌』19（１）（技術史教育学会誌編集委員会、2017.9）
・斉藤雅史・宮本真二「一般ポスター発表　鉱山閉山による生活の変容　岡山県旧柵原町を事例として（2017年度大会記録　2017年度　地域地理科学会　共催　人文地理学会一般研究発表）」『地域地理研究』23（２）（地域地理科学会、2017.12）
・波多野想･田原淳史「鉱山遺跡を対象とした保存･活用の特徴と傾向」『遺跡学研究』15（日本遺跡学会、2018）
・高原尚志「佐渡金銀山の世界遺産登録に向けての一提言」『JISRD　journal of international studies and regional development』9（国際地域研究学会、2018）
・青木達也・宮本史夫「足尾銅山通洞選鉱所の変遷と遺構に関する研究　大正中期以降から昭和10年まで」『土木史研究　講演集』38（土木学会土木史研究委員会、2018）
・松村敏「明治前期　旧加賀藩家老横山家の金融業経営と鉱山業への転換　鉱山華族横山家の研究（１）」『商経論叢』53（神奈川大学経済学会、2018.1）
・末岡照啓「近代住友の広報戦略と別子鉱山写真帳事業案内から万博・日英博覧会まで」『住友史料館報』49（住友史料館、2018.3）
・西尾典子「一九三〇年代における産業合理化政策下の安全運動　三井鉱山におけるスペシャリスト技術者の対応」『エネルギー史研究』33（九州大学記録資料館産業経済資料部門、2018.3）
・多々良友博編『佐賀県内炭鉱の古洞に関する基礎データ　「古洞照合調査」（1958－1961年度）の成果による１』（佐賀炭業史研究会、2018.3）
・神河町教育委員会『生野鉱山寮馬車道調査報告書１（神河町文化財調査報告書　第６集）』（神河町教育委員会、2018.3）
・鹿児島県立埋蔵文化財センター編『河内山鉱山跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書196）』（鹿児島県立埋蔵文化財センター、2018.3）
・佐渡市産業観光部世界遺産推進課・佐渡市教育委員会編『佐渡金銀山　新穂銀山跡分布調査報告書佐渡金銀山遺跡調査報告書20』（佐渡市産業観光部世界遺産推進課、2018.3）
・秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館『阿仁鉱山史の研究　阿仁鉱山の技術と経済が残したもの（図録集）（秋田大学COC事業阿仁鉱

山文化収集資料　2017－6)』(秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館、2018. 3)

・生野古文書教室編『読み下し銀山旧記（研究誌第４号)』(生野古文書教室、2018. 3)

・柳平則子「質に入れた衣服　質屋台帳断片から見た鉱山町の暮らし（衣の生活特集（その２))」『高志路』408（新潟県民俗学会、2018. 4)

・林上『飛騨高山　地域の産業・社会・文化の歴史を読み解く』(風媒社、2018. 4)

・平井健文「産業遺産保全における「場（milieu)」の象徴性としての「生活」 兵庫県生野鉱山跡の保全の実践を事例に」『地域社会学会年報』30（地域社会学会、2018. 5)

・矢ヶ崎善太郎「新居浜､別子銅山の産業遺産」『史迹と美術』88（６）(史迹美術同攷会、2018. 7)

・髙橋純一「製錬の歴史「別子銅山」編　明治から昭和初期における別子銅製錬技術の推移」『季刊資源と素材』３（４）(資源･素材学会、2018. 秋)

・末岡照啓監修・新居浜市・新居浜市教育委員会編『別子銅山の遺産　至宝の中国古銅器 - 別子銅山ゆかりの住友コレクション　日暮別邸移築記念特別企画展　歴史資料編』(新居浜市、2018. 9)

・廣川守監修､新居浜市･新居浜市教育委員会編『至宝の中国古銅器　別子銅山ゆかりの住友コレクション　日暮別邸移築記念特別企画展』(新居浜市、2018. 9)

・濵中晃弘・島田英樹・笹岡孝司・一ノ瀬政友「平成29年度 研究奨励金成果報告　露天掘り石灰石鉱山における土壌浸食を考慮した環境修復のための再緑化の検討」『石灰石』416（石灰石鉱業協会、2018. 11)

・室田元美「悼みの列島　日本を語り伝える（第10回）近代の繁栄を支えた炭鉱、鉱山　その光と影を訪ねて」『社会運動＝ Social movements』433（市民セクター政策機構、2019. 1)

・五味篤「製錬の歴史：「串木野鉱山」編（７）串木野鉱山の技術発達史」『季刊資源と素材』４（１）(資源・素材学会、2019. 新年)

・「文化的景観　佐渡最初の鉱山を繁栄させた「水」（特集　水が語る佐渡)」『水の文化：ミツカン水の文化センター機関誌』61（ミツカン水の文化センター、2019. 2)

・「鉱山「排水」と「水利」から見る佐渡金銀山：400年続いた鉱脈の残影（特集　水が語る佐渡)」『水の文化：ミツカン水の文化センター機関誌』61（ミツカン水の文化センター、2019. 2)

補遺（平成28年度分）

・中村 唯史、西尾 克己「石見銀山遺跡で使われた石材」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』７（しまねミュージアム協議会、2017. 3)

III

石見銀山遺跡関連調査研究

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 9

昆布山谷地区の発掘調査成果

山手貴生

昆布山谷は仙ノ山の北西を南北に走る谷で、平成22年から平成29年までの８年間にわたって発掘調査を実施した。長期的な発掘調査によって、谷の広範囲において遺構・遺物の所在が明らかとなり、近世から近代にかけての土地利用や景観の変遷を追うことのできる資料が得られたことは、非常に重要な成果である。

調査地点のいずれにおいても現在の地表面以下に複数の遺構面・硬化面が確認された。また、遺構に伴うものではないが、深く掘り込んだ箇所から青花など古い時期の遺物が出土した調査地点もあり、古くより開発され、継続的に人々が活動していたことを示すとみられる。

第３・４・５地点の最下層では岩盤加工遺構が検出されており、昆布山谷の利用が始まったころは、谷の広い範囲が開発されていたようである。その後、整地や造成などによって平坦面が形成され、居住や鉱山活動などに利用されるようになる。特に、第５地点の下層では、岩盤に縦横の溝を掘り込んでいる様相が確認できた。第５地点では時期によっては廃棄物集積場となることもあったようだが、近世をとおして何らかの形で利用されたようである。第４地点では現在の平坦面より下位から古い石垣が検出されており、区割りや敷地境の変更を伴うような土地の整備があったことが窺われる。ただし、第３地点は近世初期に岩盤加工遺構が構築されたのちは、幕末から近代までほとんど利用されていなかったことが判明した。

谷の景観変遷に係る資料として、第５・８地点ではかつての道と平坦面とを区画していた石垣と道の一部が検出された。第８地点で検出されたSW06は高さが最大で２ｍ程度ある大きな石垣で、昆布山谷の道は現在よりもかなり低い位置にあったことが判明した。発掘調査により、SW06は近代以降に発生した水害によって埋没していたことが判明しており、人々の活動のみでなく、災害によっても土地景観が変化していく様子が認められた。SW06は近代以降、水害が発生する度に埋没していったようで、水害によって埋没した上面を限定的に整備して道としていた様子も確認できている。近代における土地整備の様子が窺われる興味深い事例である。

金属生産に関連する遺構は、第１・２・５地点で検出された。第２地点では近代の藤田組の選鉱場が検出され、藤田組が石見銀山の開発に着手した当初の選鉱施設の様相が明らかとなった。第５地点では、近世前半における選鉱施設や炉跡が重層的に検出された。本地点においては遺構の周囲に残存していたズリやユリカスなどの廃棄物をサンプリングして科学分析を実施し、炉の埋土や周囲に廃棄されたユリカスには鉛や銅などの金属成分が含まれていることが判明した。

平成22（2010）年度の石見銀山調査活用委員会の場において、調査面積を必要最小限として遺構の損壊を控えてきたそれまでの調査方法に対して、調査の目的を明確にした上で、その手段としての発掘調査方法について「さらに広く、深く」掘ることで目的に沿った成果が期待されることが指摘されていた。昆布山谷の調査に着手した当初は、従来の調査方針を踏襲して調査範囲を限定していたが、いずれの調査地点においても近代まで利用されていたことが判明した。そのため、平成26年度からは「上層で検出された遺構への影響を最小限とした上で深く掘り下げる」ための調査方法を検討し、第５地点の調査に着手した。その成果として、昆布山谷第５地点においては、近世をとおしての土地利用の様相が把握できた。一方で、５・６・８地点においては、従来の方針に沿った、面積を限定したトレンチ調査も併せて実施した。いずれのトレンチ調査も昆布山谷の土地利用の変遷と景観復元を主眼とし、平坦面と道の様相を明確とすることを目的として実施した。

長期的に調査を継続することによって、考古学的成果のみならず、藤田組の『要書録』を中心とする文献史料調査や、金属生産に関連するズリやユリカス・カラミなどを対象とした科学分析調査を並行して実施することができ、まさしく総合的な調査といえる成果が得られた。

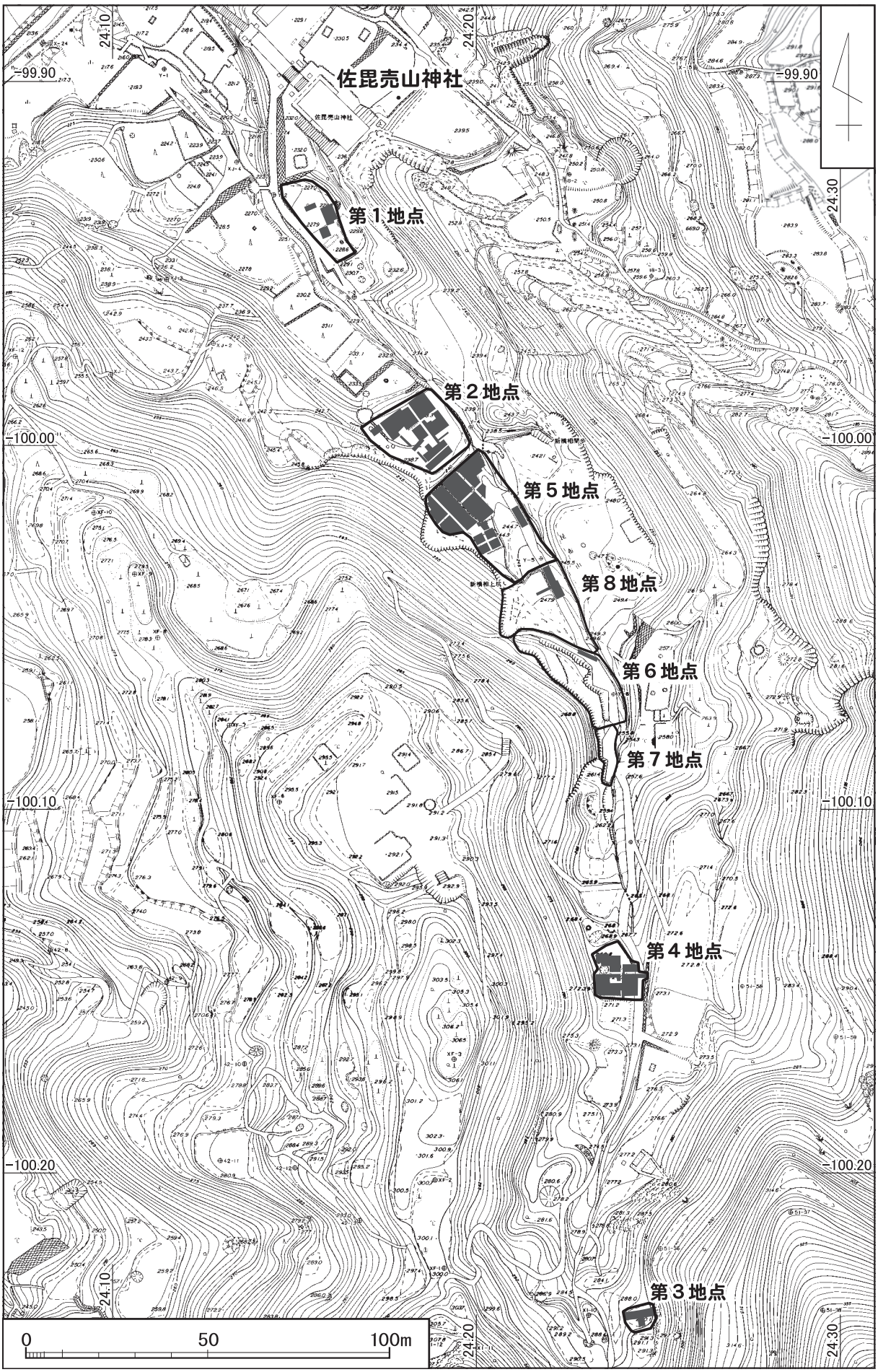


Fig.1　昆布山谷地区調査地点位置図（Ｓ＝1／1,500）

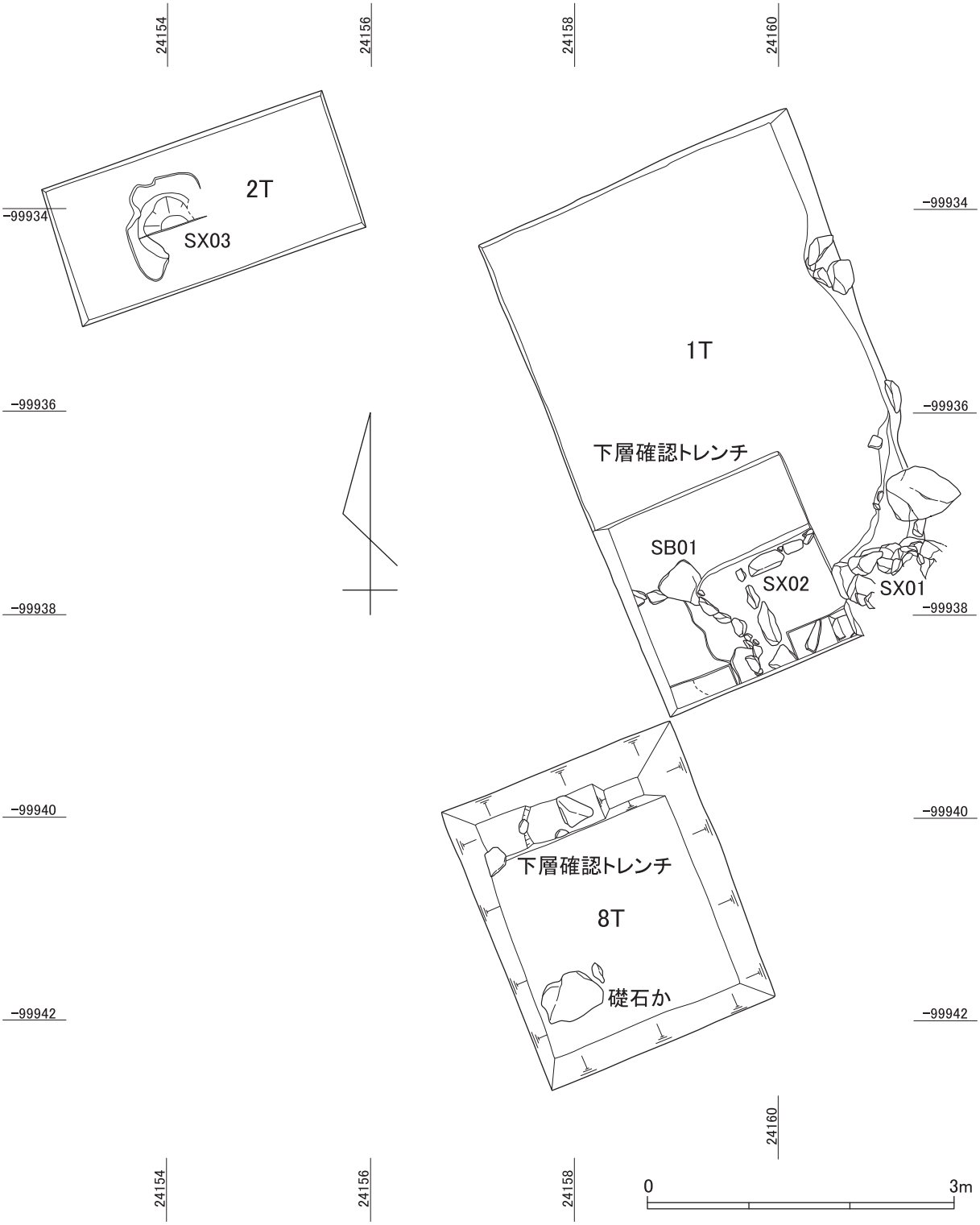
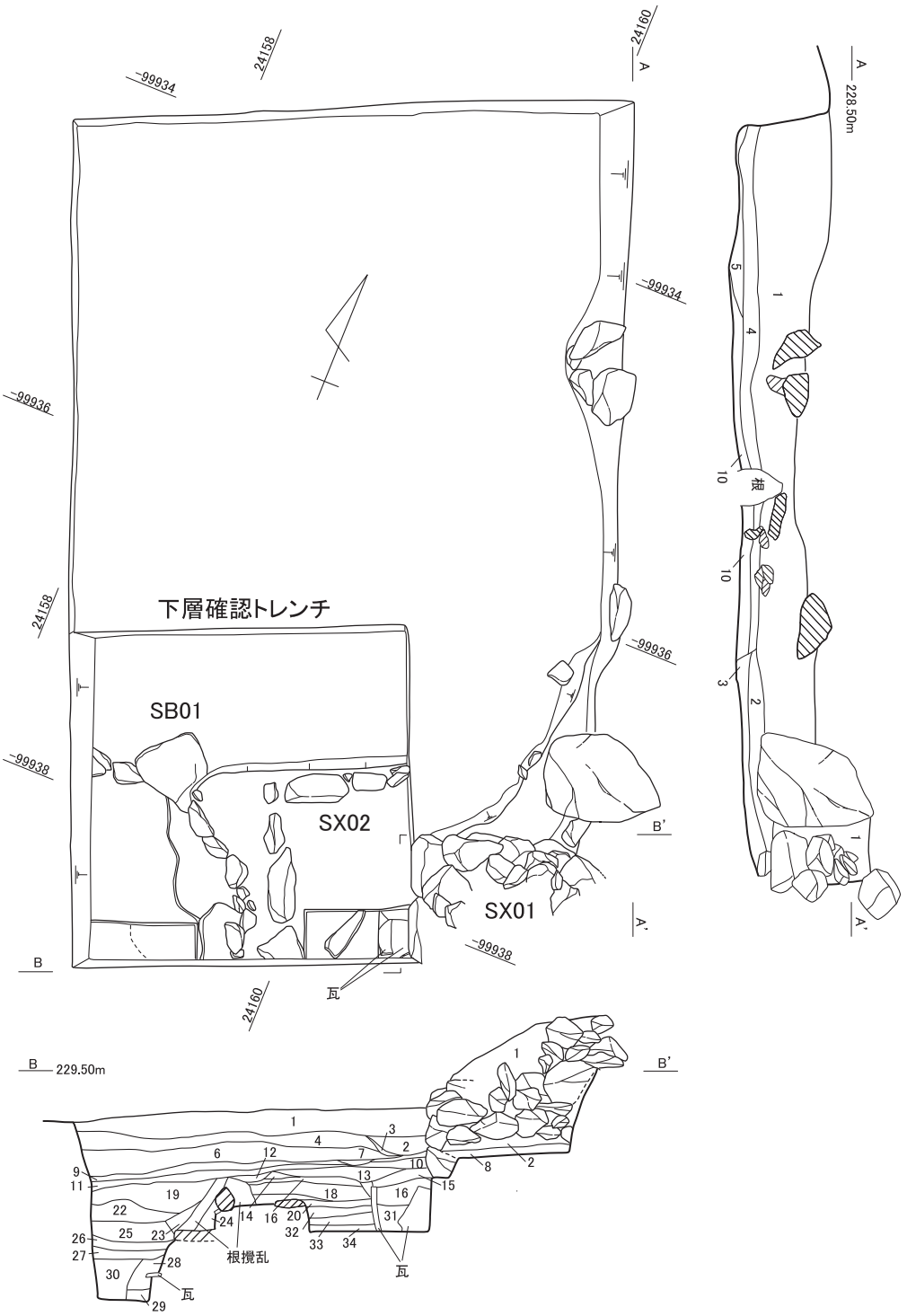


Fig.2　昆布山谷地区第１地点遺構配置図（Ｓ＝1／60）



1	10 YR 2/2	黒褐色土（表土）	
2	7.5 YR 8/4	浅黄橙色土（しまり弱、焼土粒子多量含む）	
3	7.5 YR 8/1	灰白色土（しまり弱、粘性強）	
4	10 YR 5/2	灰黄褐色土（砂質、白色礫やや多く含む）	
5	10 YR 5/3	にぶい黄褐色土（砂質、白色礫少量含む）	
6	10 YR 4/2	灰黄褐色土（砂質、2～12cmの礫やや多く含む）	
7	10 YR 3/2	黒褐色土（砂質、3cm程度の礫多量含む）	
8	10 YR 2/1	黒色土（炭化物多量、白色礫少量含む）	
9	10 YR 5/3	にぶい黄褐色土（しまり弱、白色礫少量含む）	
10	10 YR 7/6	明黄褐色土（しまり強、白色礫少量含む）	
11	10 YR 5/3	にぶい黄橙色土（しまり弱、白色礫少量含む）	
12	10 YR 4/1	褐灰色土	
13	10 YR 4/3	にぶい黄橙色土（白色礫少量含む）	
14	10 YR 5/3	灰黄褐色土（しまり強、白色礫少量含む）	
15	10 YR 5/2	灰黄褐色土（しまり強、白色礫少量含む）	
16	10 YR 4/2	灰黄褐色土（しまり強、白色礫少量含む）	
17	10 YR 4/2	灰黄褐色土（しまり強、白色礫極少量含む）	
18	10 YR 6/4	にぶい黄橙色土（しまり強、白色礫・粘質土ブロック少量含む）	
19	10 YR 4/2	灰黄褐色土（しまり強、1cm程度の礫少量含む）	
20	10 YR 6/3	にぶい黄橙色土（しまり強、白色礫少量含む）	
21	10 YR 6/4	にぶい黄橙色土（しまり弱、白色礫少量含む）	
22	10 YR 4/1	褐灰色土（しまり弱、砂質土）	
23	10 YR 7/4	にぶい黄橙色土（しまり・粘性強、砂質土少量含む）	
24	10 YR 5/3	灰黄褐色土（粘性強、砂質土少量含む）	
25	10 YR 4/1	褐灰色土（しまり弱、粗い砂質土少量含む）	
26	7.5 YR 4/3	褐色土（しまり・粘性強）	
27	10 YR 3/2	黒褐色土（しまり強、シルト・粘質土ブロック少量含む）	
28	10 YR 3/2	黒褐色土（しまり弱、1cm程度の礫少量含む）	
29	10 YR 4/2	灰黄褐色土（しまり弱、1cm程度の礫多量含む）	
30	7.5 YR 4/4	褐色土（しまり強、シルト粒子・ブロック多量含む）	
31	7.5 YR 4/2	灰黄褐色土（しまり強、白色礫少量含む）	
32	10 YR 6/6	明黄褐色土	
33	10 YR 6/3	にぶい黄褐色土（白色礫・黒色粒子少量含む）	
34	10 YR 7/4	にぶい黄褐色土（白色礫・粘質土ブロック少量含む）	

0　2m

Fig.3　昆布山谷地区第１地点第１トレンチ平面・断面図（Ｓ＝1／40）

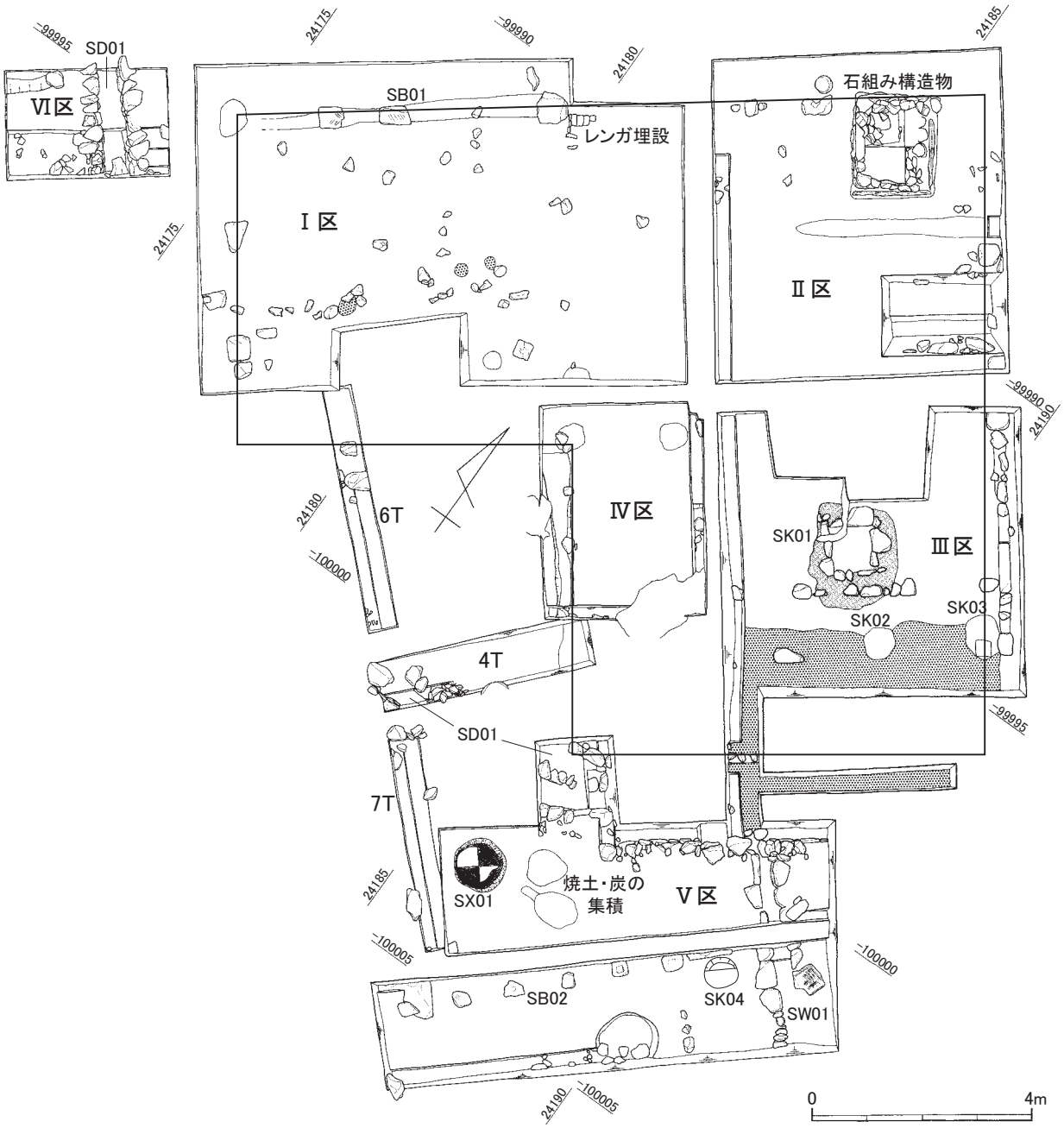
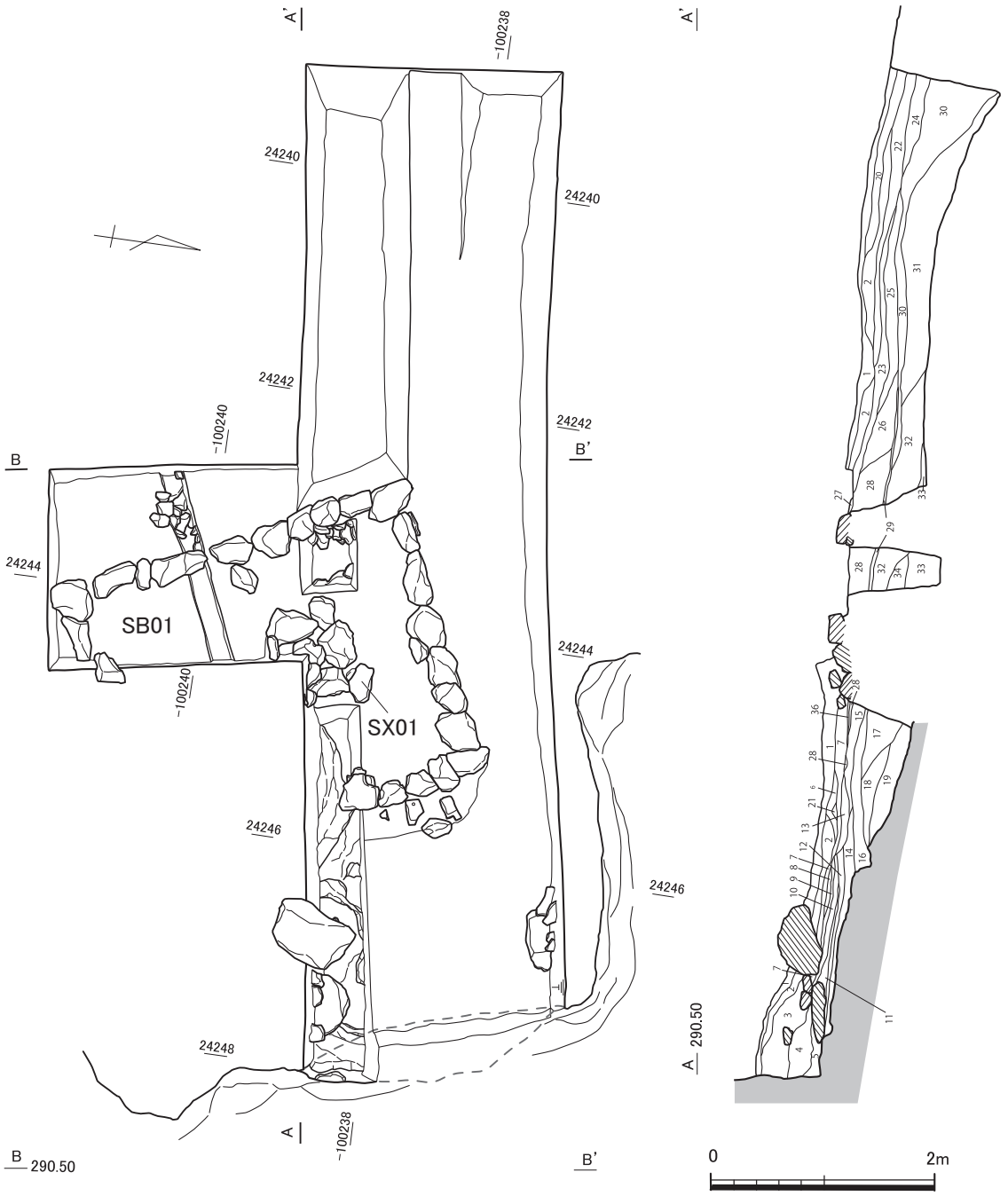


Fig.4　昆布山谷地区第２地点遺構配置図（Ｓ＝1／120）



1　10 YR　2/1　黒色土
2　10 YR　6/1　褐灰色土
3　10 YR　2/1　黒色ズリ層(10.0cm大のズリ)
4　10 YR　6/6　明黄褐色粘質土(2.0～3.0cmの礫含む)
5　10 YR　4/2　灰黄褐色土
6　7.5YR　6/4　にぶい燈色粘質土
7　5 YR　4/4　にぶい赤褐色礫層
8　10 YR　7/6　明黄褐色粘質土(礫を含み、しまりがない)
9　10 YR　7/1　灰白色粘質土(しまりがない)
10　7.5YR　6/6　燈色礫硬化層
11　10 YR　2/1　黒色炭層(4.0～5.0cmの礫が固くしまる)
12　10 YR　7/1　灰白色粘質土(しまっている)
13　10 YR　4/2　灰黄褐色土(しまりがなく、10.0cm以下の礫を含む)
14　10 YR　4/1　褐灰色土(しまりがない)
15　10 YR　3/2　黒褐色土(しまりがない)
16　10 YR　4/1　褐灰色礫層
17　10 YR　6/4　にぶい黄燈色礫層
18　10 YR　3/2　黒褐色礫層(しまりがない)
19　10 YR　3/1　黒褐色礫層(10.0cm弱の礫で固くしまる)
20　10 YR　6/4　にぶい黄燈色粘質土(しまりがない)
21　10 YR　6/1　褐灰色土
22　10 YR　7/6　明黄褐色粘質土(2.0～3.0cmの礫含む)
23　5 YR　4/4　にぶい赤褐色土
24　10 YR　2/1　黒色ズリ層(10.0～20.0cmのズリ)
25　10 YR　3/2　黒褐色ズリ層(10.0cm未満のズリ)
26　7.5YR　4/3　褐色礫層(20.0～30.0cmの礫)
27　10 YR　8/2　灰白色粘質土(しまっている)
28　10 YR　7/4　にぶい黄燈色礫層
(20.0～30.0cmの礫でSB01にともなう整地層)
29　10 YR　2/1　黒色炭層
30　7.5YR　6/6　燈色ズリ層(4.0～5.0cmのズリで固くしまる)
31　10 YR　3/1　黒褐色ズリ層(10.0cm大のズリ)
32　10 YR　3/3　暗褐色ズリ層(4.0～5.0cmのズリ)
33　10 YR　3/3　暗褐色土(しまりがない)
34　10 YR　3/3　暗褐色ズリ層(2.0～3.0cmのズリ)
35　2.5YR　4/2　灰赤色ズリ層(10.0cm未満のズリ)
36　10 YR　2/1　黒色炭層

Fig.5　昆布山谷地区第３地点ＳＢ01（Ｓ＝1／60）

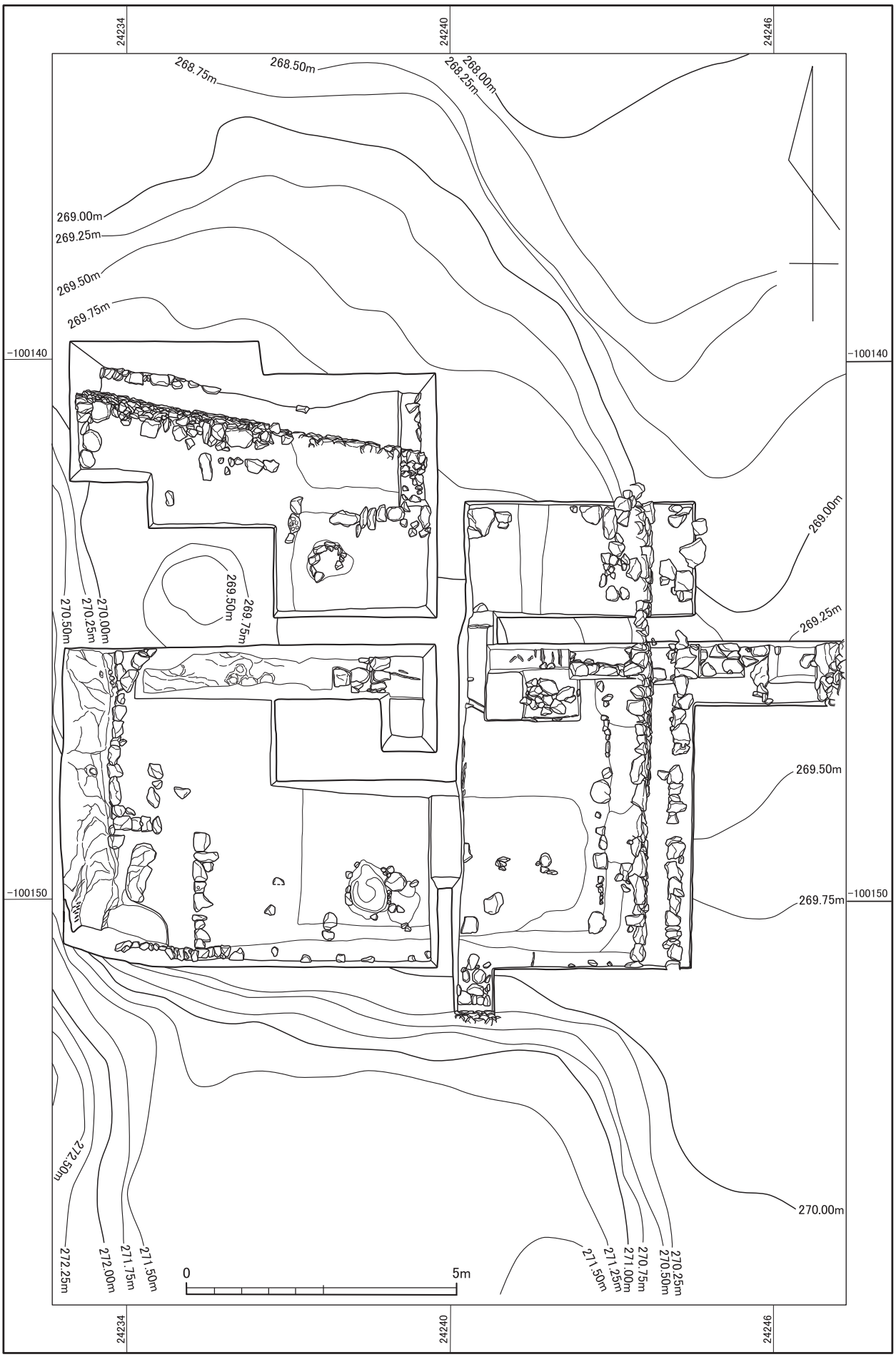


Fig.6　昆布山谷地区第４地点周辺地形図、遺構配置図（Ｓ＝1／100）

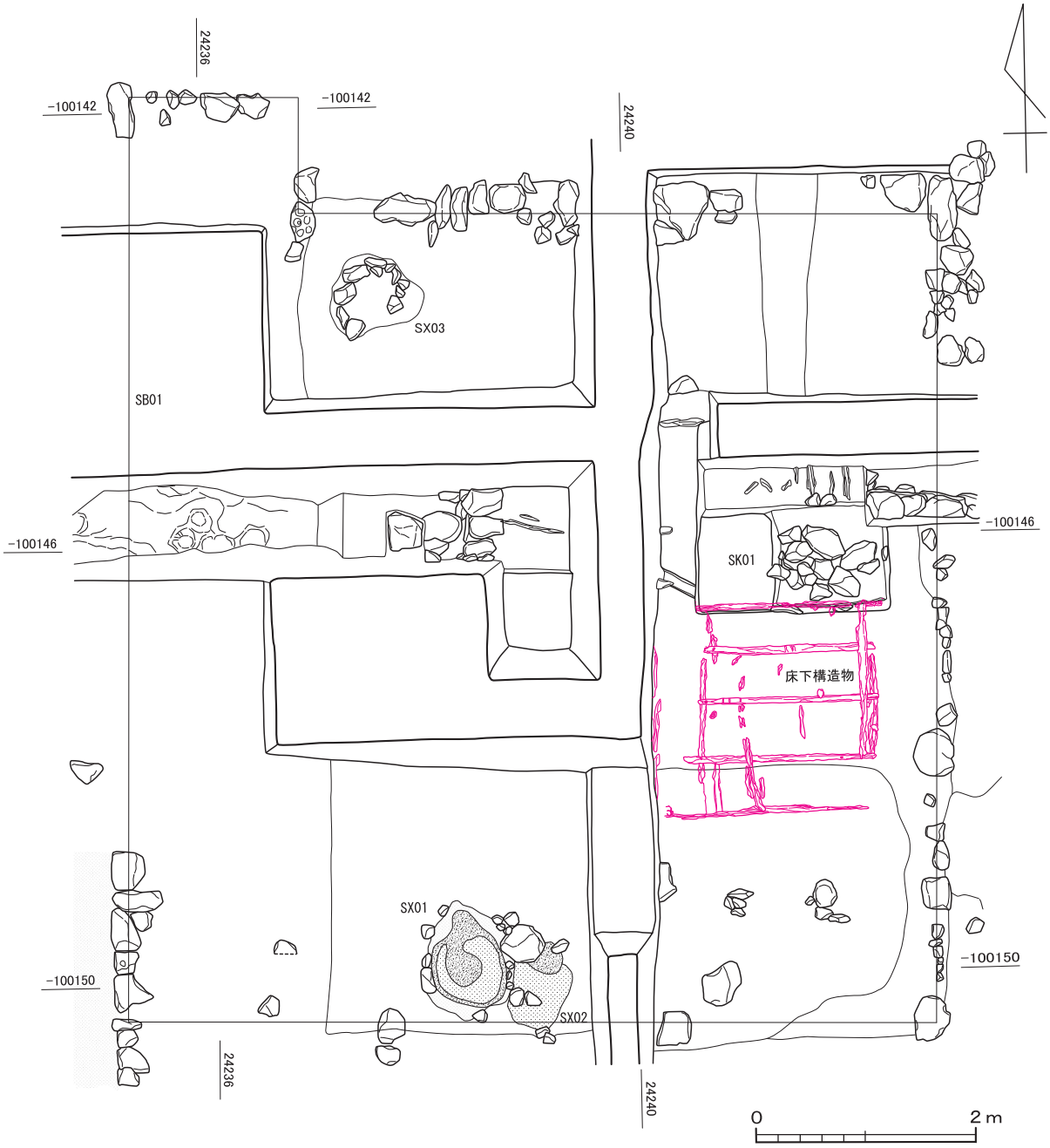


Fig.7　昆布山谷地区第４地点ＳＢ01平面図・断面図（Ｓ＝1／60）

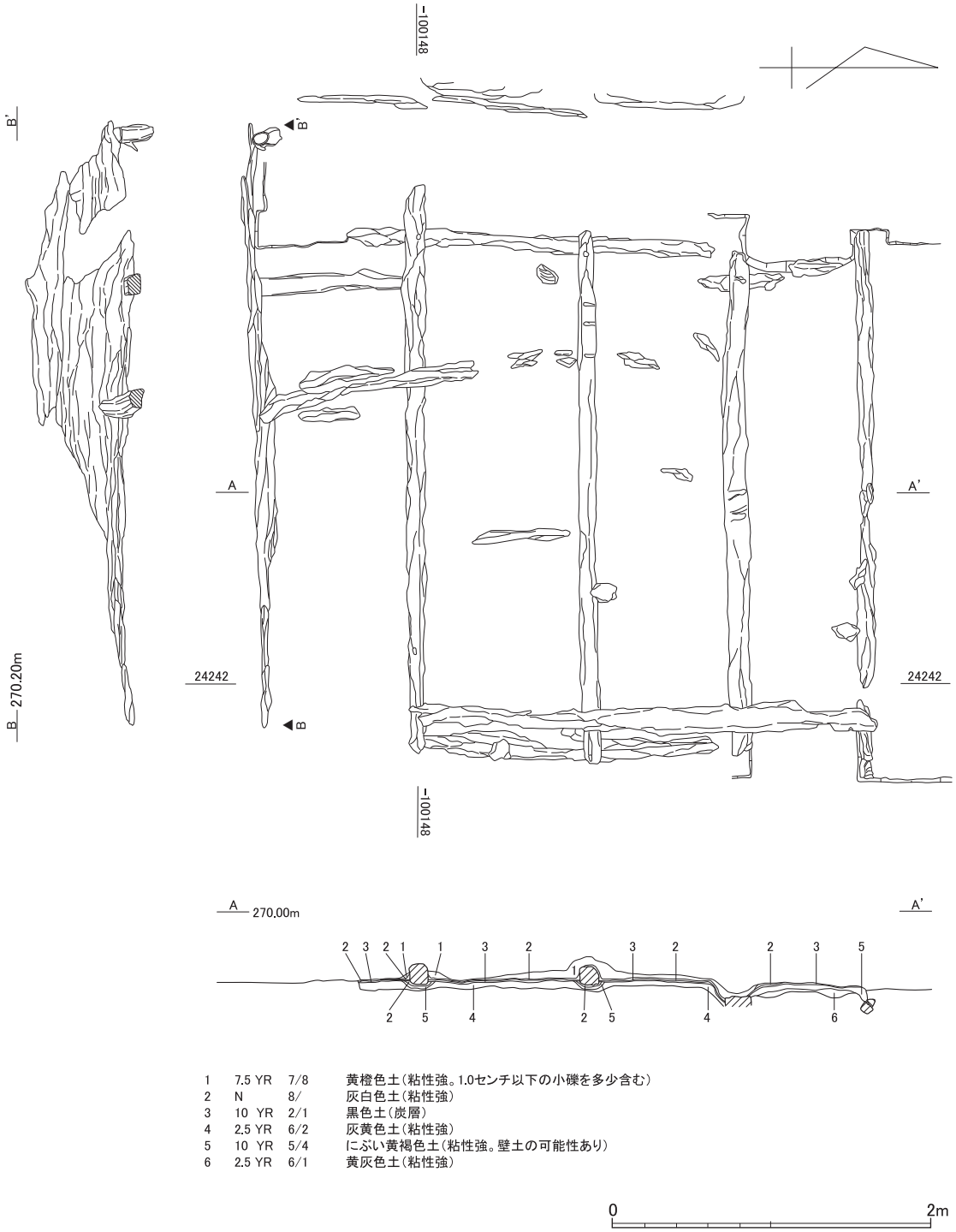


Fig.8　昆布山谷地区第４地点ＳＢ01床下遺構（Ｓ＝1／40）

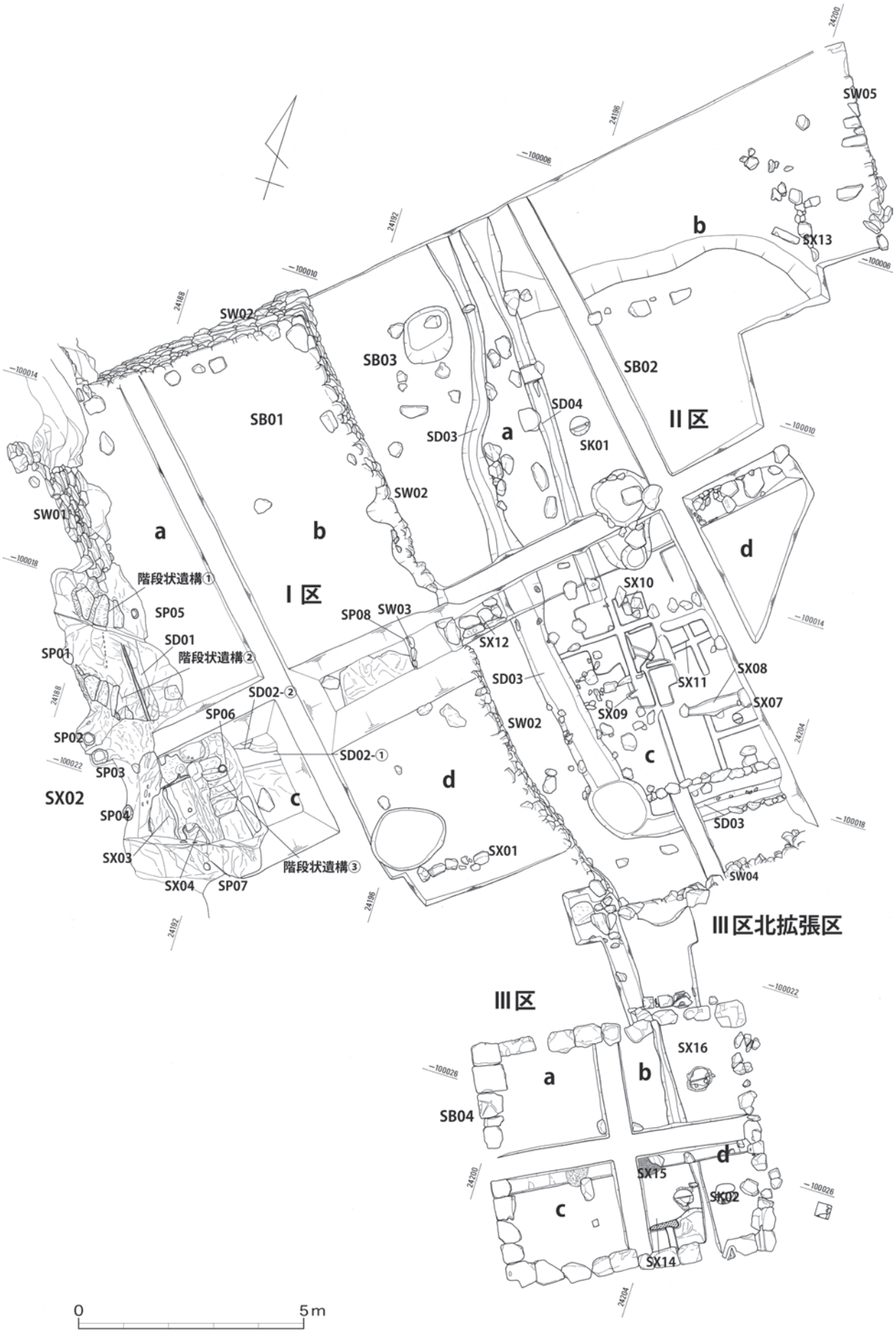


Fig.9　昆布山谷地区第５地点上層遺構配置図（Ｓ＝1／120）

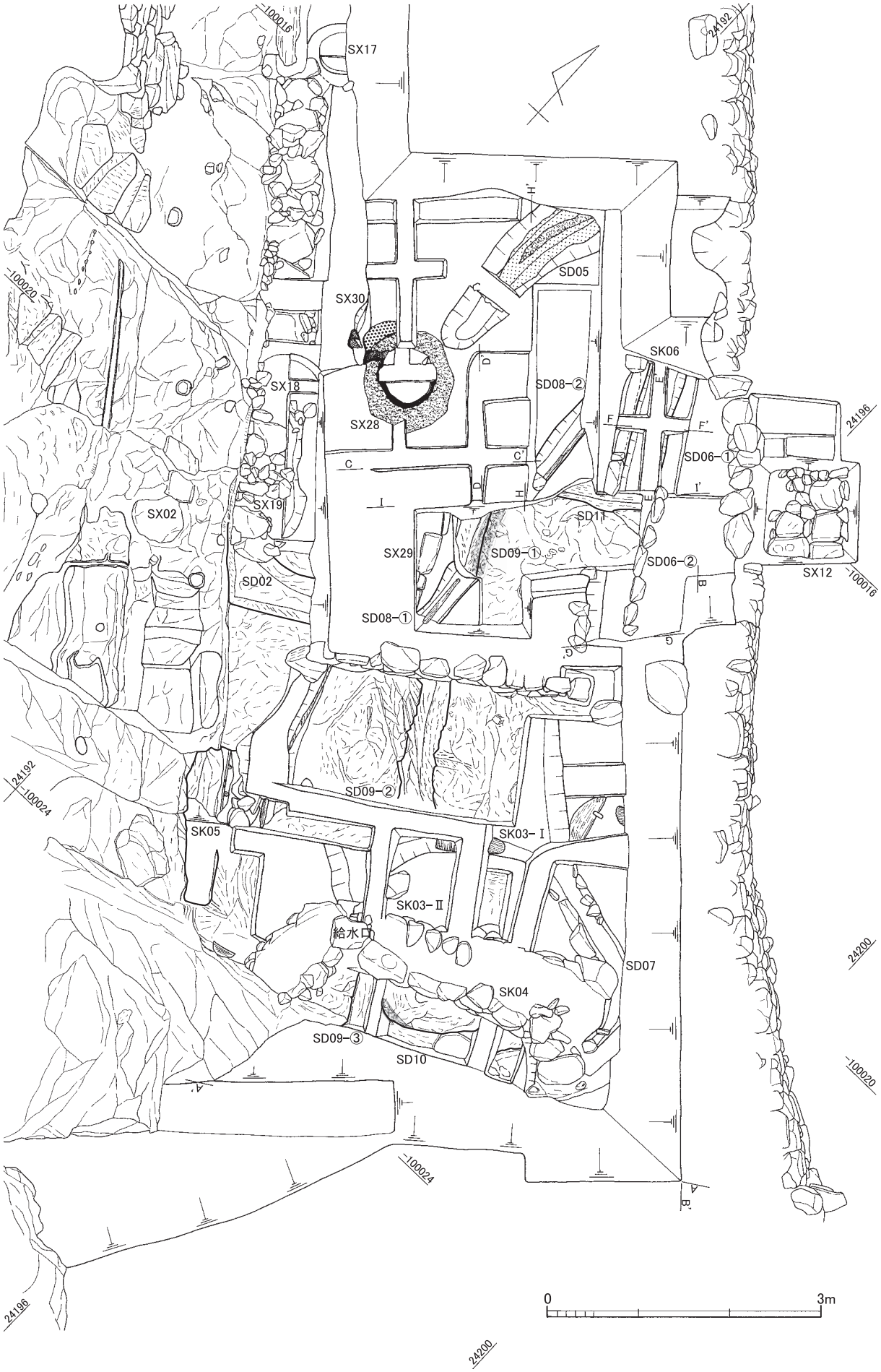


Fig.10　昆布山谷地区第５地点Ⅰ区下層遺構配置図（Ｓ＝1／60）

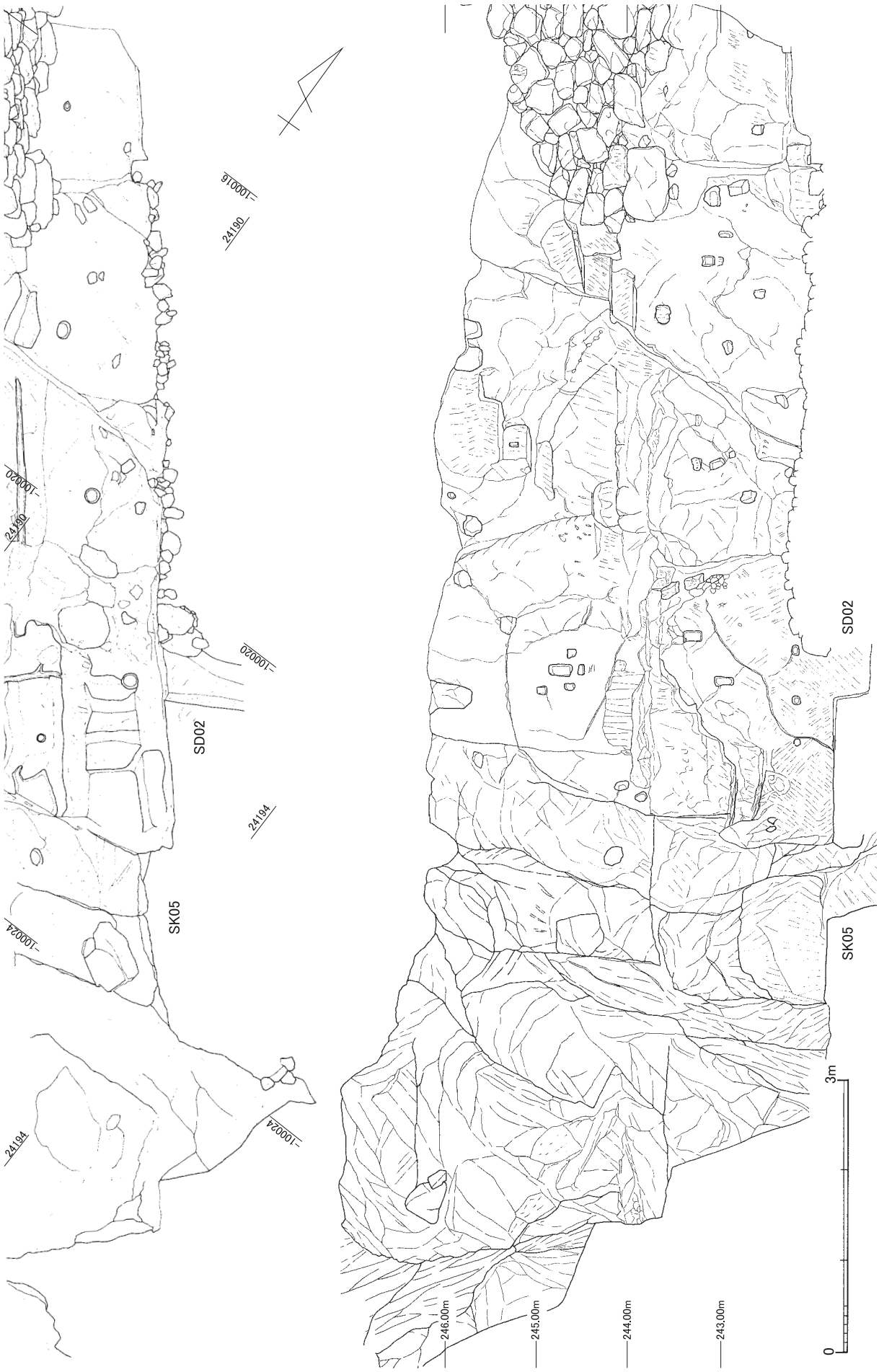
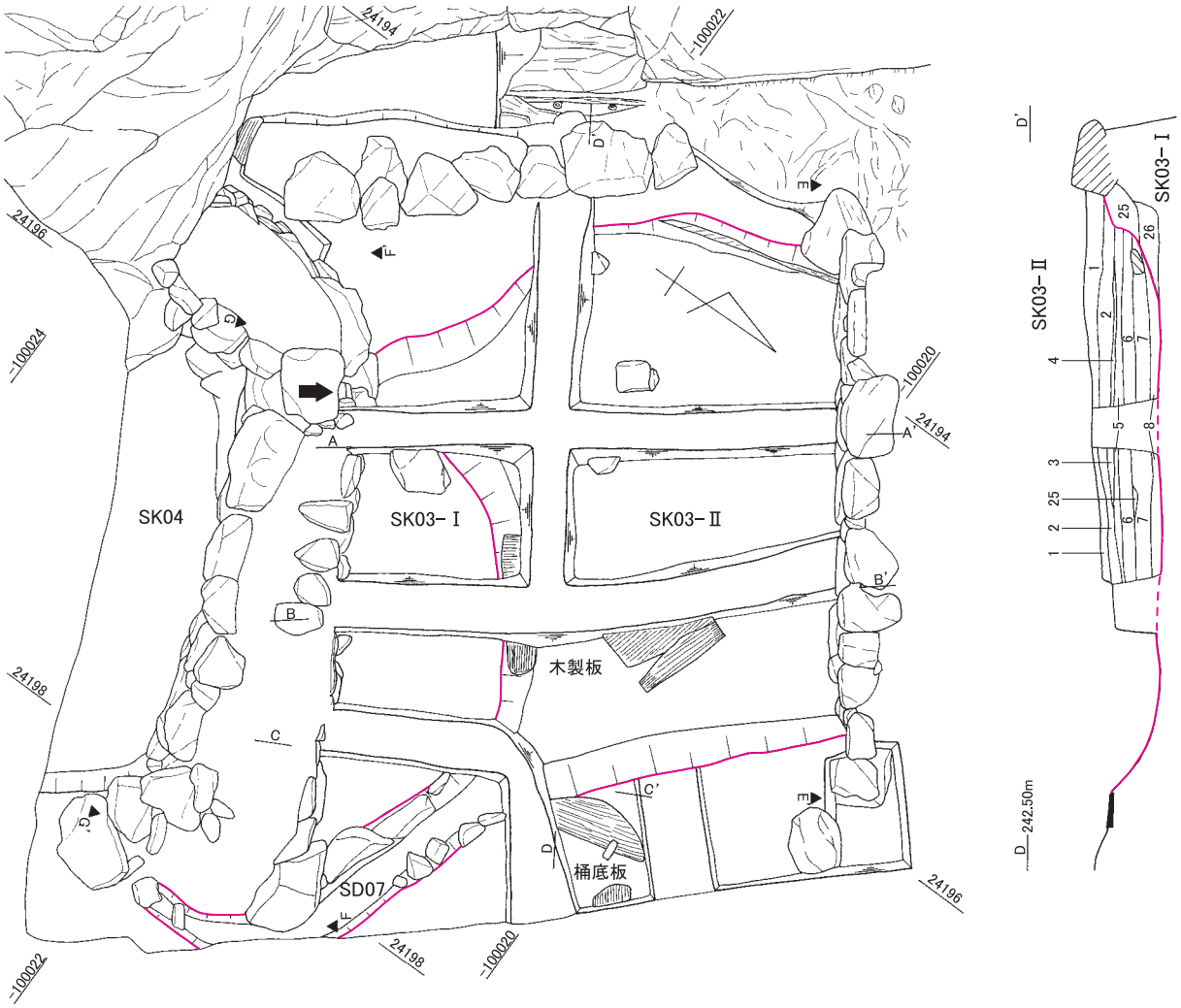
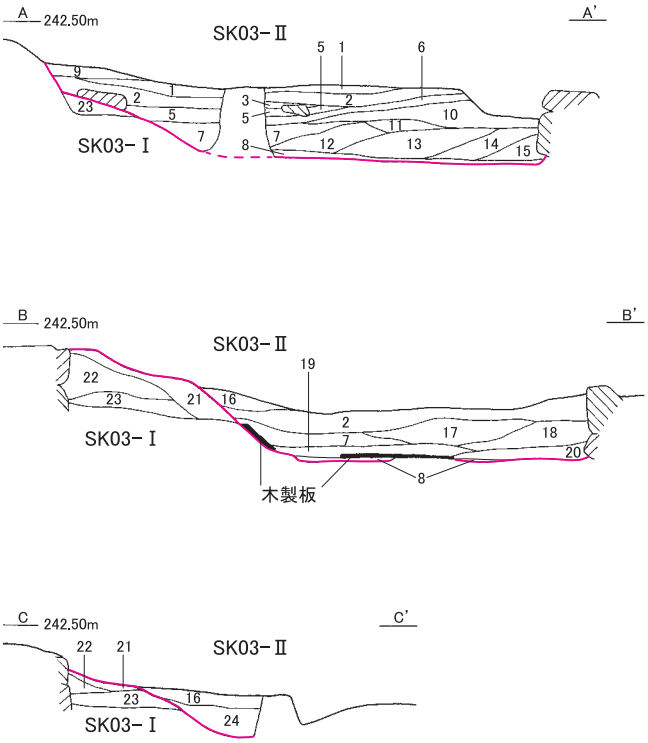


Fig.11　昆布山谷地区第５地点Ⅰ区岩盤加工遺構ＳＸ02平面図・立面図（Ｓ＝1／60）





1	N	黒色土（炭化物層）
2	10 YR 3/2	黒褐色土（砂質、ユリカス）
3	10 YR 8/6	黄橙色土（緻密な粘質）
4	10 YR 7/3	にぶい黄橙色土（粘質）
5	10 YR 6/4	にぶい黄橙色土（やや砂質、粗い粒度）
6	10 YR 4/2	灰黄褐色土（やや砂質、木片含む）
7	7.5 YR 4/4	褐色土（やや硬化、マンガン鉄分を含む）
8	5 G 3/1	暗緑灰色土（粘質、ややシルト質）
9	2.5 Y 8/2	灰白色土（粘質、砂質土が混じる）
10	2.5 Y 6/1	黄灰色土（やや砂質、0.5センチ以下の小礫を含む）
11	10 G 4/1	暗緑灰色土（砂質、ユリカス）
12	2.5 Y 7/3	浅黄色土（砂質、1センチ以下の小礫を含む）
13	2.5 Y 5/1	黄灰色土（ユリカスと0.5センチ以下の小礫を含む）
14	7.5 YR 7/4	にぶい橙色土（0.5センチ以下の小礫を多く含む）
15	2.5 Y 5/2	暗灰黄色土（砂質、ユリカス層）
16	10 YR 3/1	黒褐色土（砂質、ユリカス層）
17	10 YR 6/2	灰黄褐色土（2～5センチ大のズリ層）
18	5 Y 6/3	オリーブ黄色土（2～5ミリ大の礫層）
19	2.5 Y 4/1	黄灰色土（砂質、ユリカス層）
20	5 Y 7/2	灰白色土（5ミリ大の小礫層）
21	10 YR 7/6	明黄褐色土（硬化、マンガン含む）
22	10 YR 3/1	黒褐色土（5ミリ大の礫を多く含む）
23	10 YR 7/6	明黄褐色土（硬化、マンガン含む）
24	5 Y 5/2	灰オリーブ色土（砂質、ユリカス層）
25	10 YR 7/6	明黄褐色土（硬化、マンガン含む）
26	5 Y 8/1	灰白色土（粘質）

0 2m

Fig.12　昆布山谷地区第５地点Ⅰ区ＳＫ03・04平面図・土層断面図（Ｓ＝1／40）

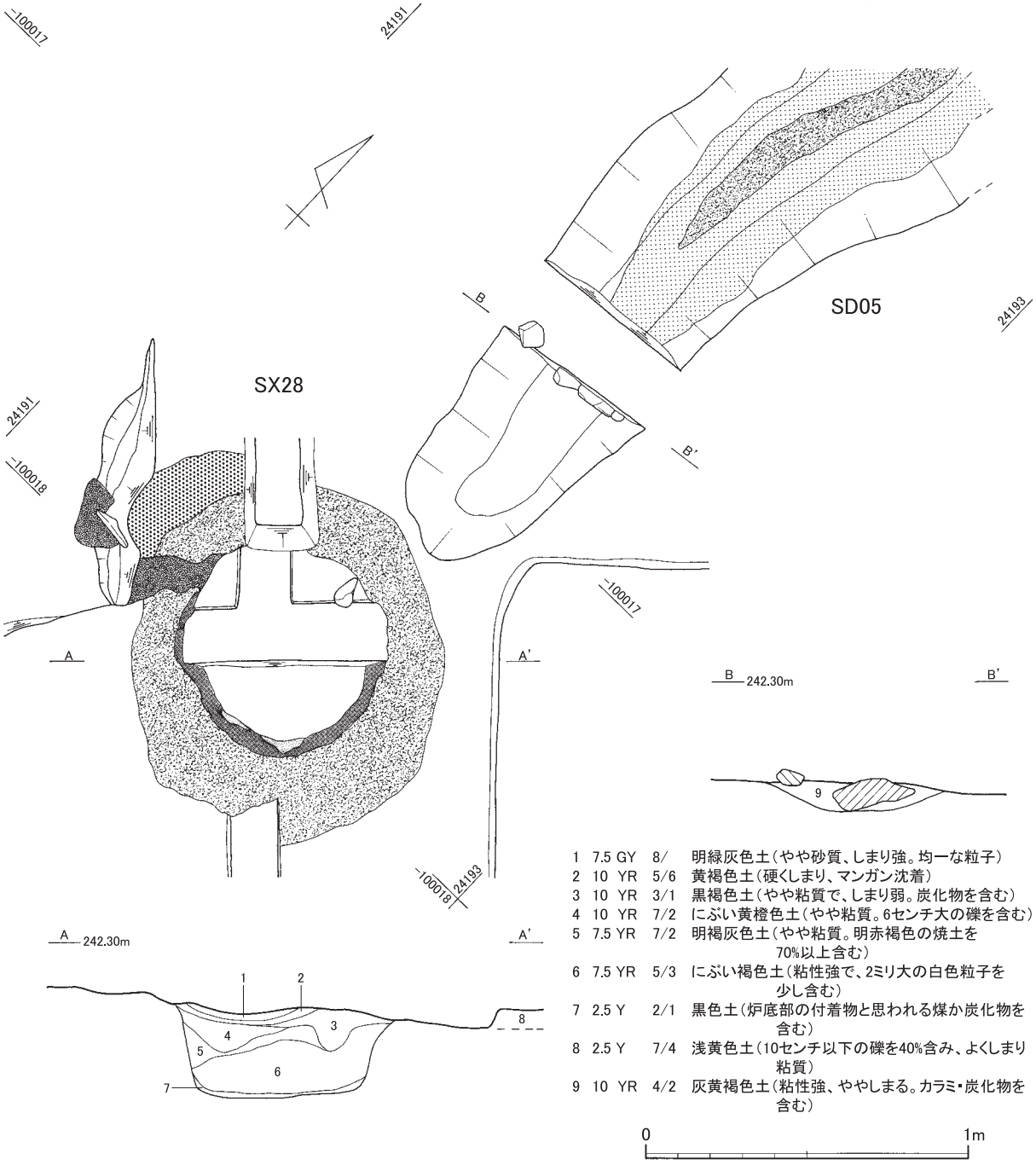
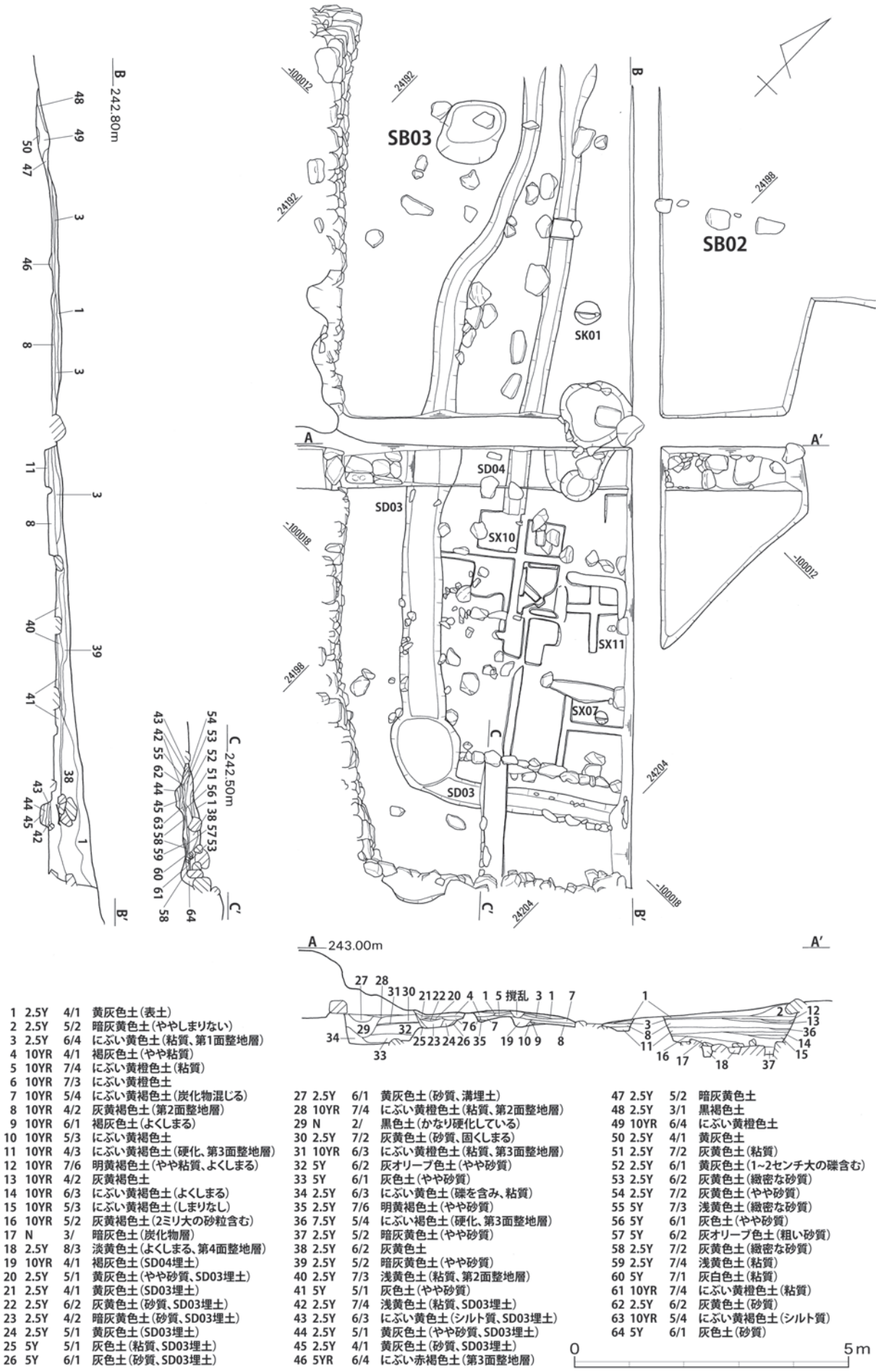
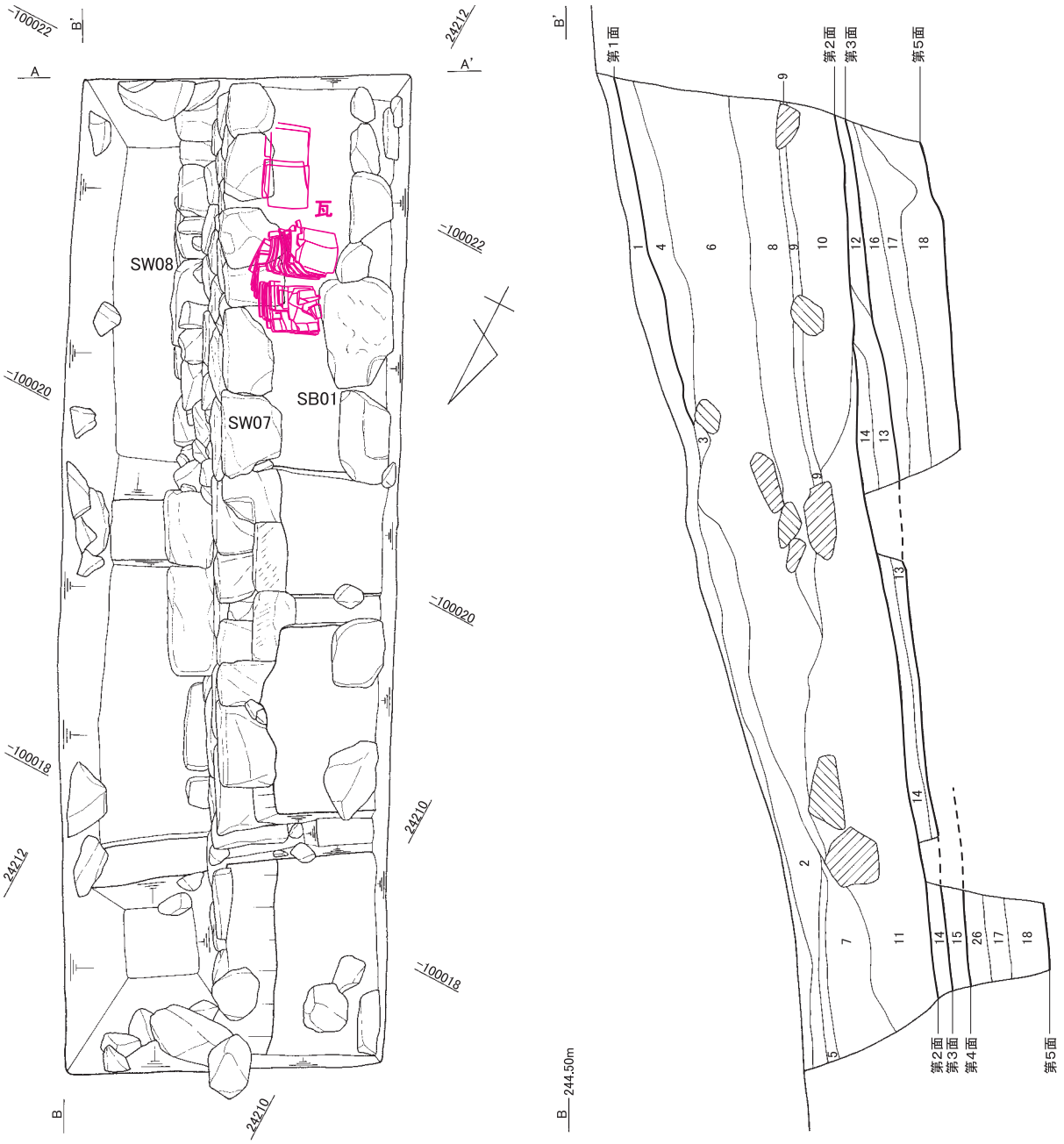


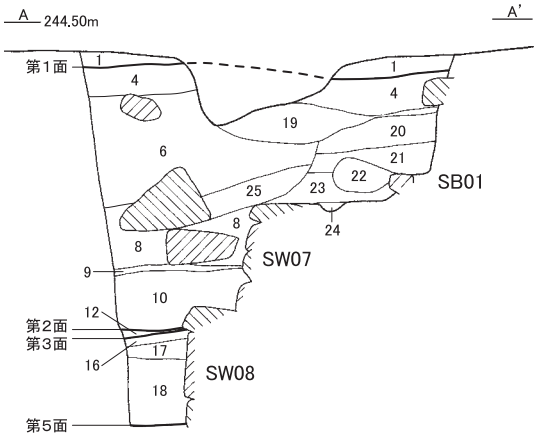
Fig.13　昆布山谷地区第５地点Ｉ区ＳＸ28・ＳＤ05平面図・土層断面図（Ｓ＝1／20）



1	2.5Y	4/1	黄灰色土（表土）
2	2.5Y	5/2	暗灰黄色土（ややしまりない）
3	2.5Y	6/4	にぶい黄色土（粘質、第1面整地層）
4	10YR	4/1	褐灰色土（やや粘質）
5	10YR	7/4	にぶい黄橙色土（粘質）
6	10YR	7/3	にぶい黄橙色土
7	10YR	5/4	にぶい黄褐色土（炭化物混じる）
8	10YR	4/2	灰黄褐色土（第2面整地層）
9	10YR	6/1	褐灰色土（よくしまる）
10	10YR	5/3	にぶい黄褐色土
11	10YR	4/3	にぶい黄褐色土（硬化、第3面整地層）
12	10YR	7/6	明黄褐色土（やや粘質、よくしまる）
13	10YR	4/2	灰黄褐色土
14	10YR	6/3	にぶい黄褐色土（よくしまる）
15	10YR	5/3	にぶい黄褐色土（しまりなし）
16	10YR	5/2	灰黄褐色土（2ミリ大の砂粒含む）
17	N	3/	暗灰色土（炭化物層）
18	2.5Y	8/3	淡黄色土（よくしまる、第4面整地層）
19	10YR	4/1	褐灰色土（SD04埋土）
20	2.5Y	5/1	黄灰色土（やや砂質、SD03埋土）
21	2.5Y	4/1	黄灰色土（SD03埋土）
22	2.5Y	6/2	灰黄色土（砂質、SD03埋土）
23	2.5Y	4/2	暗灰黄色土（砂質、SD03埋土）
24	2.5Y	5/1	黄灰色土（SD03埋土）
25	5Y	5/1	灰色土（粘質、SD03埋土）
26	5Y	6/1	灰色土（砂質、SD03埋土）
27	2.5Y	6/1	黄灰色土（砂質、溝埋土）
28	10YR	7/4	にぶい黄橙色土（粘質、第2面整地層）
29	N	2/	黒色土（かなり硬化している）
30	2.5Y	7/2	灰黄色土（砂質、固くしまる）
31	10YR	6/3	にぶい黄橙色土（粘質、第3面整地層）
32	5Y	6/2	灰オリーブ色土（やや砂質）
33	5Y	6/1	灰色土（やや砂質）
34	2.5Y	6/3	にぶい黄色土（礫を含み、粘質）
35	2.5Y	7/6	明黄褐色土（やや砂質）
36	7.5Y	5/4	にぶい褐色土（硬化、第3面整地層）
37	2.5Y	5/2	暗灰黄色土（やや砂質）
38	2.5Y	6/2	灰黄色土
39	2.5Y	5/2	暗灰黄色土（やや砂質）
40	2.5Y	7/3	浅黄色土（粘質、第2面整地層）
41	5Y	5/1	灰色土（やや砂質）
42	2.5Y	7/4	浅黄色土（粘質、SD03埋土）
43	2.5Y	6/3	にぶい黄色土（シルト質、SD03埋土）
44	2.5Y	5/1	黄灰色土（やや砂質、SD03埋土）
45	2.5Y	4/1	黄灰色土（砂質、SD03埋土）
46	5YR	6/4	にぶい赤褐色土（第3面整地層）
47	2.5Y	5/2	暗灰黄色土
48	2.5Y	3/1	黒褐色土
49	10YR	6/4	にぶい黄橙色土
50	2.5Y	4/1	黄灰色土
51	2.5Y	7/2	灰黄色土（粘質）
52	2.5Y	6/1	黄灰色土（1~2センチ大の礫含む）
53	2.5Y	6/2	灰黄色土（緻密な砂質）
54	2.5Y	7/2	灰黄色土（やや砂質）
55	5Y	7/3	浅黄色土（緻密な砂質）
56	5Y	6/1	灰色土（やや砂質）
57	5Y	6/2	灰オリーブ色土（粗い砂質）
58	2.5Y	7/2	灰黄色土（緻密な砂質）
59	2.5Y	7/4	浅黄色土（粘質）
60	5Y	7/1	灰白色土（粘質）
61	10YR	7/4	にぶい黄橙色土（粘質）
62	2.5Y	6/2	灰黄色土（砂質）
63	10YR	5/4	にぶい黄褐色土（シルト質）
64	5Y	6/1	灰色土（砂質）

Fig.14　昆布山谷地区第５地点Ⅱ区平面図・土層断面図（Ｓ＝1／100）





1	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土（粘性しまりともにない。0.1～0.2ミリ粒子のシルト質。表土）
2	10 YR	3/2	黒褐色土（粘性あり、しまり弱い。0.1ミリ以下粒子の均一な粘質土。流土）
3	10 YR	3/4	暗褐色土（粘性しまりともにない。0.2～0.3ミリ粒子のシルト質。堆積土）
4	10 YR	2/3	黒褐色土（粘性弱く、しまりあり。1センチ程度の礫を含むシルト質。硬化面）
5	2.5 Y	5/3	黄褐色土（粘性しまりともにない。0.5ミリ程度の砂粒を含む砂質土。流土）
6	2.5 Y	4/3	オリーブ褐色土（粘性しまりともにない。0.1ミリ以下粒子のシルト質。流土）
7	2.5 Y	3/2	黒褐色土（粘性しまりともにない。2センチ以下の礫を含む砂質土。流土）
8	2.5 YR	4/3	オリーブ褐色土（粘性しまりともにない。小礫を多く含む砂質土。流土）
9	10 YR	3/3	暗褐色土（粘性あり、しまりない。0.2ミリ以下粒子のシルト質。堆積土）
10	10 YR	4/4	褐色土（粘性しまりともにない。小礫を多く含む砂質土。流土）
11	10 YR	4/4	褐色土（粘性しまりともにあり。均一な粘質土。流土）
12	5 YR	4/8	赤褐色土（粘性なく、しまりあり。0.3ミリ以下粒子でマンガン沈着。硬化面）
13	10 YR	4/3	にぶい黄褐色土（粘性しまりともにあり。0.1ミリ以下粒子で粘質土。流土）
14	10 YR	8/1	灰白色土（粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下の砂粒を含む硬化層。硬化面）
15	10 YR	6/8	明黄褐色土（粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下砂粒でマンガン沈着。硬化面）
16	10 YR	8/1	暗灰白色土（粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下の白色砂粒を含む。硬化面）
17	7.5 YR	2/3	極暗褐色土（粘性弱、しまりあり。0.8ミリ以下の黒色粒子を含む。整地土）
18	2.5 Y	3/2	黒褐色土（粘性あり、しまり弱。0.5ミリ程度の白色粒子を含む。流土）
19	10 YR	6/4	にぶい黄橙色土（粘質弱、しまりあり。5～10センチ大の礫を含む。）
20	10 YR	4/1	褐灰色土（粘性なく、しまり弱い。にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む。）
21	2.5 Y	5/2	暗灰黄色土（粘性なく、しまり弱い。やや砂質土）
22	10 YR	8/1	灰白色土（粘性しまりともに強い。1ミリ大の粒子を30%含む粘質土）
23	10 YR	6/4	にぶい黄橙色土（粘性弱く、しまりあり。1～2センチ大の小礫を10%含む。）
24	2.5 Y	3/2	黒褐色土（粘性しまりともにない。やや目の粗い砂質土。）
25	10 YR	5/1	褐灰色土（粘性しまりともにない。3～5センチ大の礫を20%含む砂質土。）
26	10 YR	5/8	黄褐色土（粘性なく、しまりあり。0.5ミリ以下の砂粒でマンガン沈着。硬化面）

0　　2m

Fig.15　昆布山谷地区第５地点第１トレンチ平面図・土層断面図（1／40）

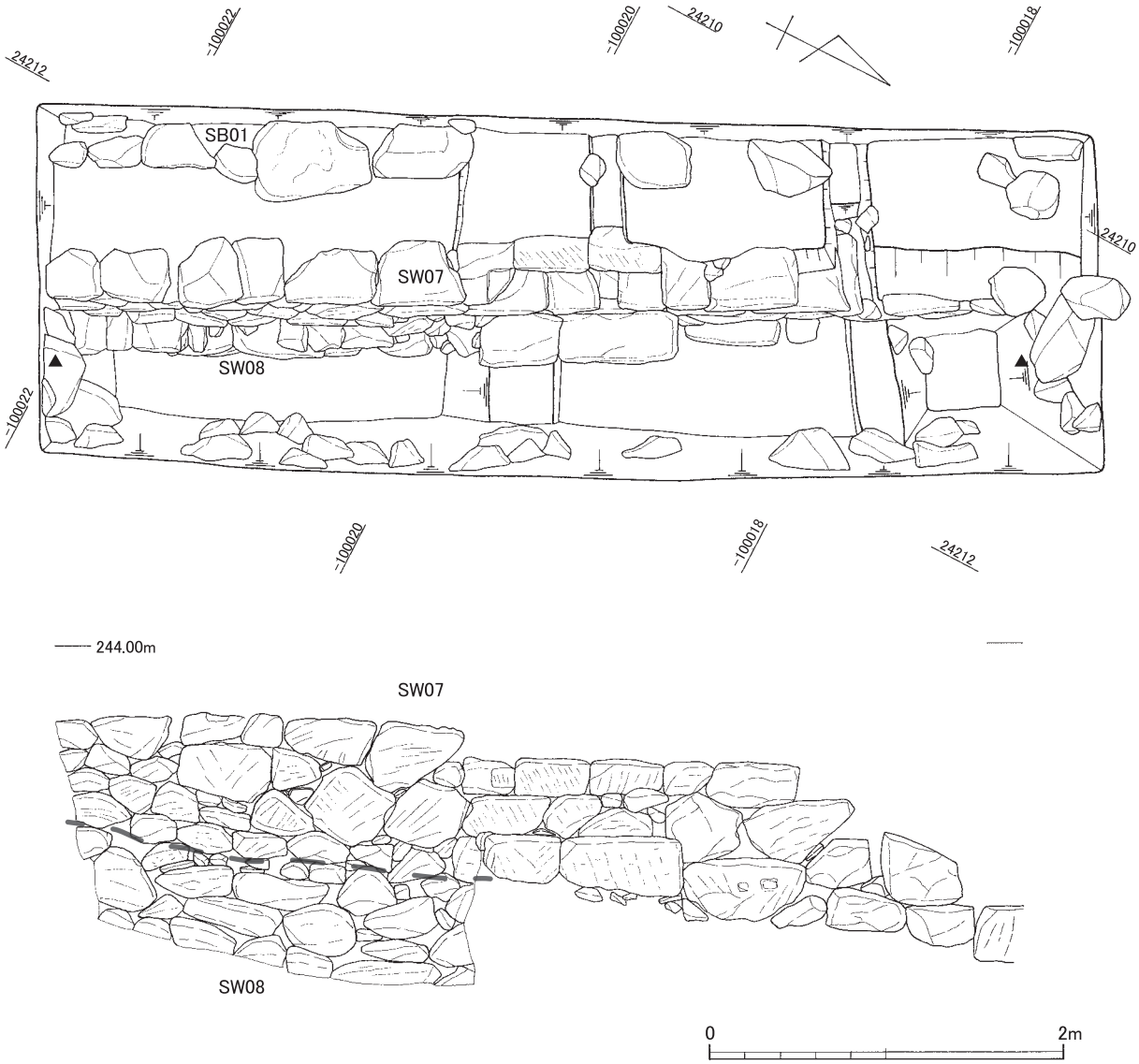


Fig.16　昆布山谷地区第５地点第１トレンチ平面図・立面図（1／40）

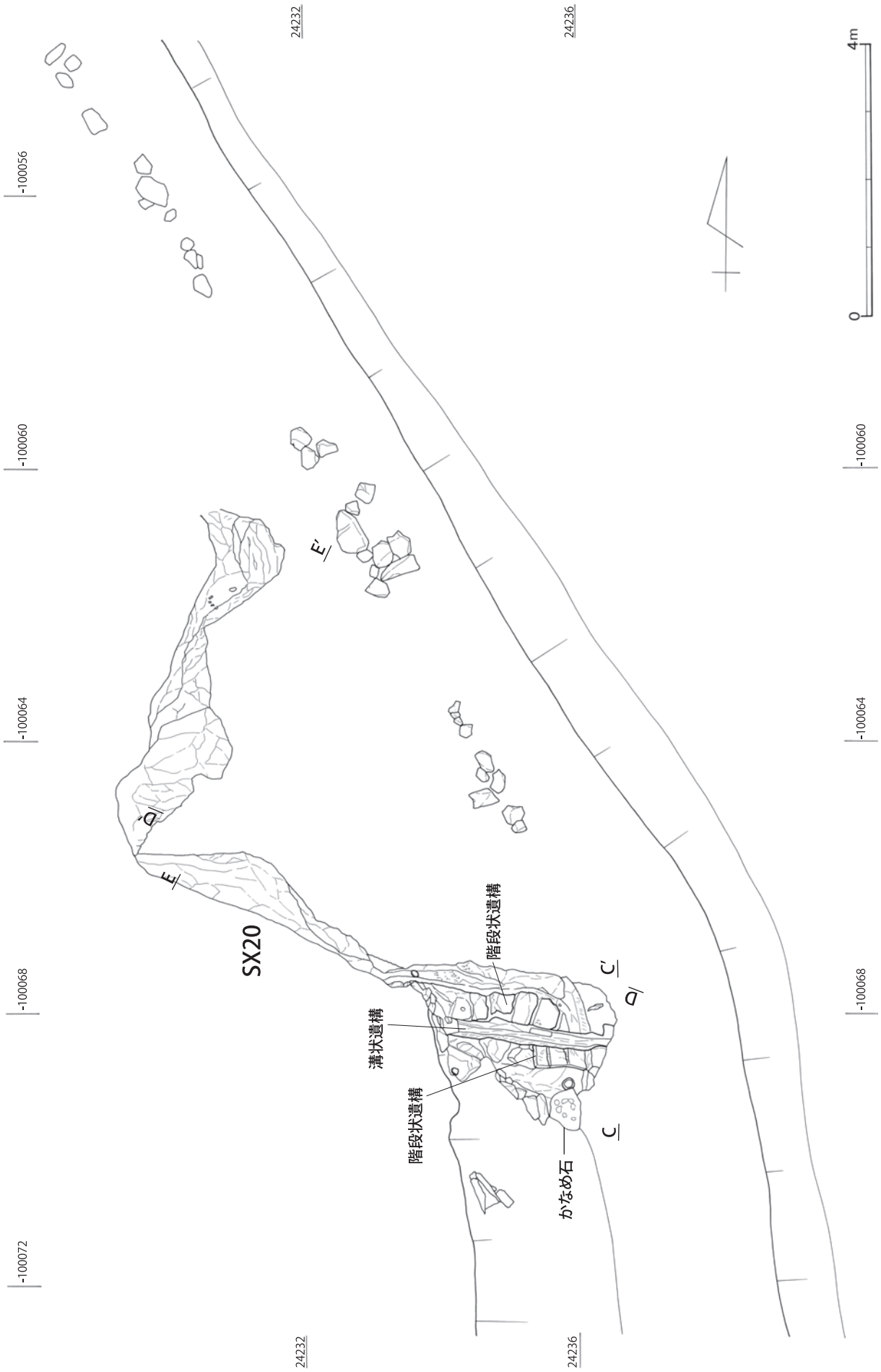


Fig.17　昆布山谷地区第 6 地点平面図（S ＝1／80）

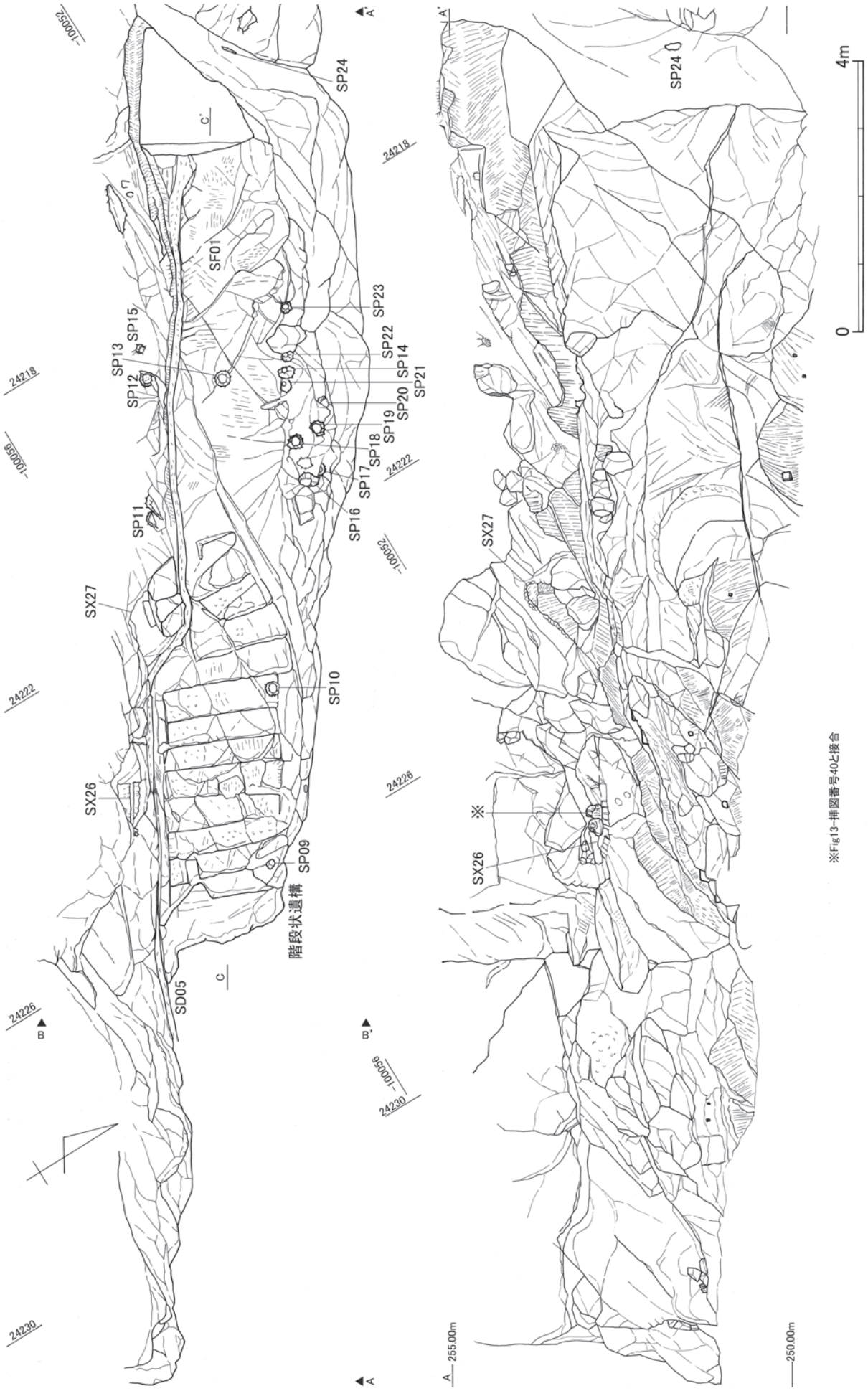


Fig.18　昆布山谷地区第６地点 SX25平面図・立面図（S＝1／80）

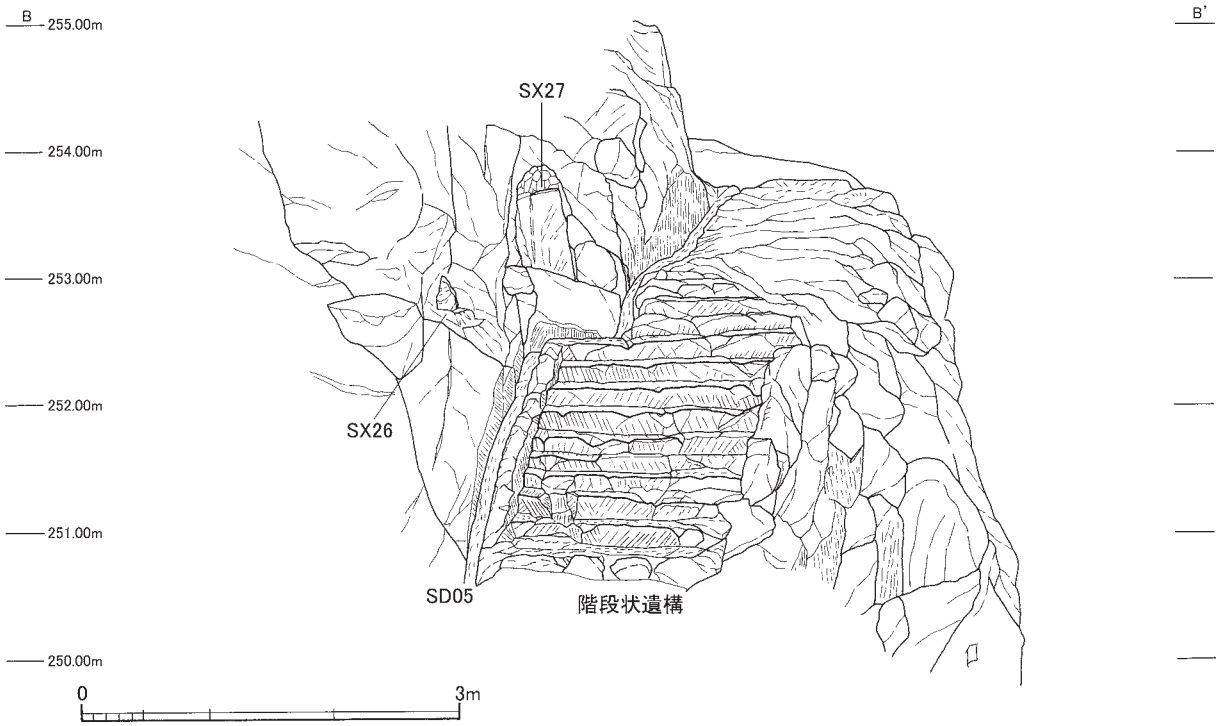


Fig.19　昆布山谷地区第６地点 SX25立面図（Ｓ＝1／60）

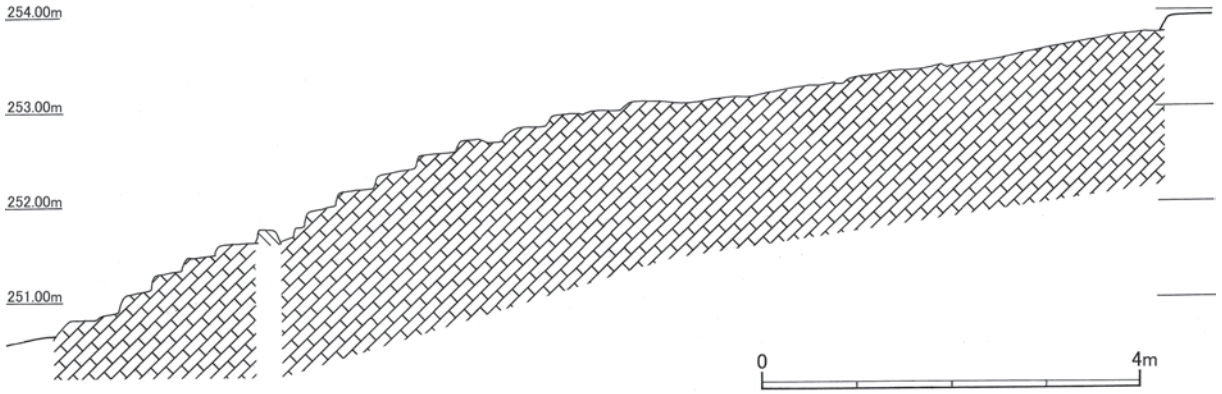


Fig.20　昆布山谷地区第６地点 SX25横断面図（Ｓ＝1／80）

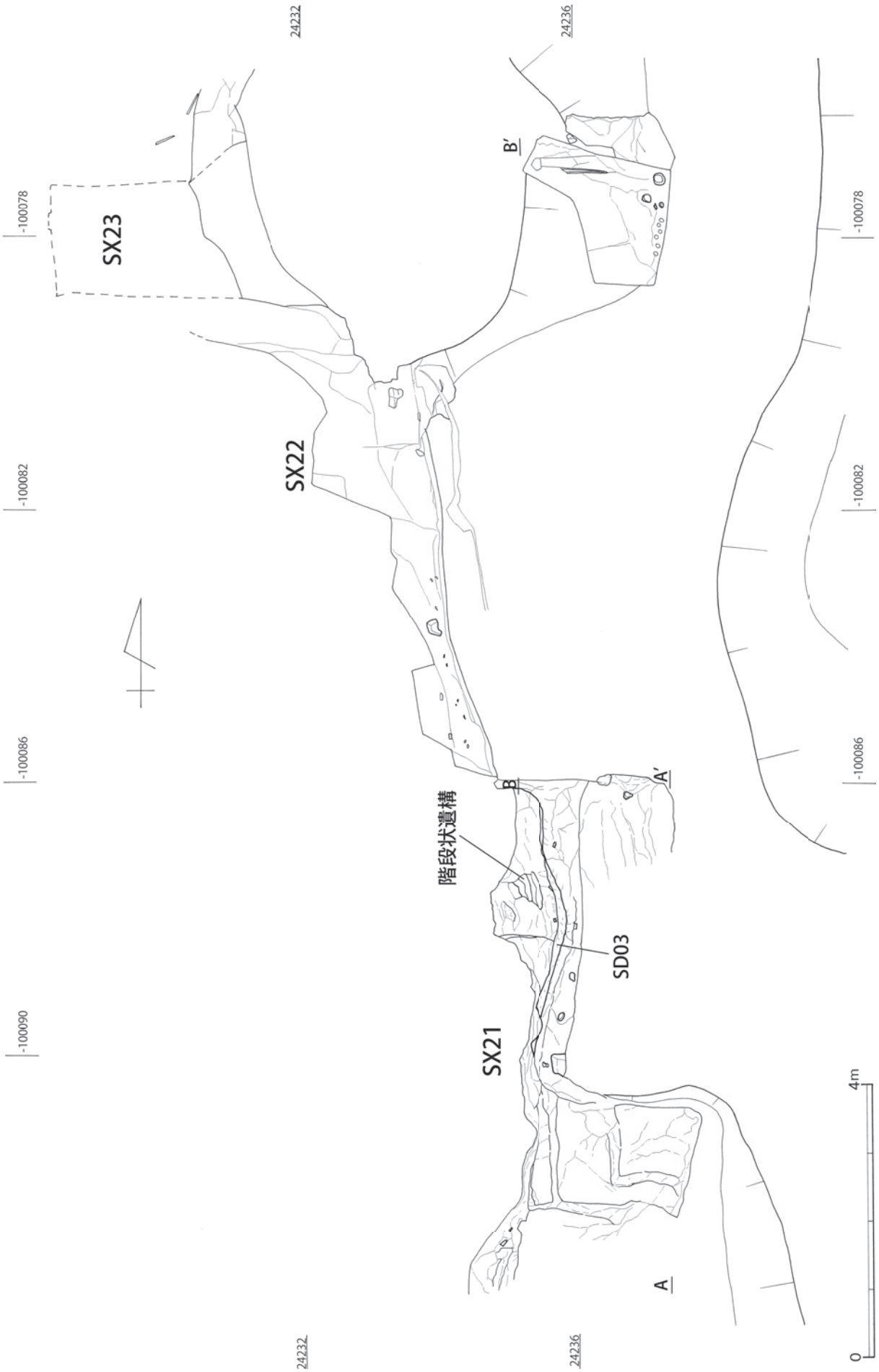


Fig.21　昆布山谷地区第７地点平面図（Ｓ＝1／80）

Fig.22　昆布山谷地区第８地点石垣平面図・立面図（S＝1／40）

昆布山谷地区第１地点全景（北西より）

昆布山谷地区第２地点全景（南より）

昆布山谷地区第３地点全景（北東より）

昆布山谷地区第４地点全景（北東より）

昆布山谷地区第５地点　Ⅱ区（南東より）

昆布山谷地区第５地点　Ⅲ区（南東より）

昆布山谷地区第５地点　Ⅰ区下層（西より）

昆布山谷地区第５地点　道トレンチ（北より）

昆布山谷地区第５地点　SX02全景（南東より）

昆布山谷地区第６地点　ＳＸ20全景（北東より）

昆布山谷地区第７地点　ＳＸ21・22全景（南東より）

昆布山谷地区第６地点　SX25全景（南東より）

昆布山谷地区第８地点　SW06全景（北より）

大久保間歩における2017年11月から１年間のコウモリ類個体数の推移

安藤誠也

１．はじめに

大久保間歩は石見銀山遺跡の坑道の一つで、2008年から観光利用が開始されている。石見銀山遺跡は、2007年に世界遺産に登録され、中でも大久保間歩は観光の中心的な存在に位置付けられている。また、大久保間歩は世界遺産登録以前より、コウモリ類にとって重要な生息環境であることが指摘されてきた（澤田・大畑，1992）。ここでは５種のコウモリ［キクガシラコウモリ（図１）、コキクガシラコウモリ（図２）、モモジロコウモリ（図３）、ユビナガコウモリ（図４）、テングコウモリ（図５）］が確認されている。そのうちコキクガシラコウモリを除く４種が冬眠利用をしており（大畑, 2007）、観光利用にあたってはコウモリ保護との両立を図る必要があった。

そこで大田市教育部石見銀山課、島根県教育委員会、島根県立三瓶自然館を運営する公益財団法人しまね自然と環境財団では、2006年から大久保間歩において、観光によるコウモリ類の冬眠への影響をモニタリングする目的で個体数調査を実施している。2016年までの調査は、冬眠期に限定したものであったため、年間を通したコウモリ類の利用状況は不明であった。今回、これまで報告の無い年間を通した大久保間歩におけるコウモリ類の個体数について調査を行ったので、その推移について報告する。

２．調査地概況

大久保間歩は島根県大田市大森町の仙ノ山中腹に位置し（坑口は標高310m に開口）、福石鉱床と呼ばれる銀等の金属資源が多く産出した区域に存在する。江戸期に手堀りによって開発され、明治期に機械堀りによって拡幅された。

観光利用については、人数を限定したツアーによってのみ入坑がなされている。ツアーは土日祝日に１日４回、各回20人限定で、毎回の入坑時間は30分程度で、ガイドと保安員が同行して行われている（大田市教育委員会，2009）。また、坑道内にはAC 電源による LED 証明が４箇所に設置されているが、基本的に消灯されており、ツアー入坑時のみ点灯することとなっている。なお、コウモリへの影響を軽減することを目的とし、ツアーは冬眠期である12月～２月の間、休止されている。

３．調査方法

調査は2017年11月22日から2018年11月26日までの間で、おおよそ１週間から２週間に一回の間隔で実施した。調査範囲は踏査が可能な坑口から約180m地点までとした。コウモリの数は目視によってカウントし、個体数が多い場合は適宜、数取り器を用いた。また、坑内（坑口より140m 地点）および坑外（坑口より約30m 離れたところにある管理棟）に温度記録用のデータロガー（藤田電機、WATCH LOGGER 255F）を設置し毎正時に記録を行った。

４．結果と考察

図６は2017年11月22日から2018年11月26日までの大久保間坑内および坑外の気温を示したものである。2017年11月から2018年５月までは、坑外の気温の変動に合わせて坑内も気温が変化している。しかし、５月以降で坑内の気温がおおよそ７℃以上になると、坑外の気温が昼夜で変動しても坑内は一定した状態となる。坑内には空気の流れがあり、夏期など外気温より坑内温度が低い場合は、冷たく密度の大きい空気が坑口から流出し、逆に冬期など外気温が坑内温度より低い場合は坑内にむかって空気が流入する。

次に、図７は、大久保間歩を利用するコウモリ類個体数の推移について、種ごとに示したものであ

る。５種のコウモリ類が見られ、その利用形態は次の１～３のタイプに分けることが出来る。

第１のタイプは冬眠期の利用が主であり11月～３月にかけて個体数が最大になる。キクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ユビナガコウモリがこれに該当する。コウモリ類の冬眠は主なエサである飛翔性の昆虫が活動しない時期をやり過ごす目的で行われる。コウモリ類は種ごとに冬眠時の最適温度が違い、キクガシラコウモリでは、６～７℃（庫本，1977）、モモジロコウモリは３～４℃（大畑，2016）、ユビナガコウモリは５～８℃（船越，2007）と考えられている。これよりも温度が低下もしくは上昇すると覚醒し、冬眠に最適な温度の場所へと移動してしまう。また、春期から秋期において殆どみられなくなるのは、これらの種が要求する温度より、大久保間歩坑内は低温なためと考えられる。例えば８月にコウモリ類が利用していた場所の温度として、キクガシラコウモリで23.5～21.5℃、ユビナガコウモリで22.0～20.0℃（船越・内田，1978）などの報告がある。

第２のタイプは、冬眠期に少しずつ集合し、春期に個体数が最大になり初夏に急減するタイプである。テングコウモリがこれに該当するが、冬眠利用だけではない可能性が示唆される。天井や壁面の窪みに１～数頭程度でいるほか、十数頭の群塊を形成することがある。

第３のタイプは６月から９月にかけて大久保間歩坑内で確認され、コキクガシラコウモリがこれにあたる。コキクガシラコウモリは大久保間歩において、1983年６月に確認（大畑, 2007）された以降は生息情報がなく、35年ぶりの確認となった。これは以降の調査が11月から３月までの冬眠期に実施されたためと考えられる。本種は12℃前後の比較的暖かい場所で冬眠するため（大畑, 2017）、冬期にそれより低温な大久保間歩は冬眠場所にはならないためである。

５．まとめ

年間を通じた調査の結果、これまで不明であった冬眠期以外の大久保間歩におけるコウモリ類の利用実態が明らかとなった。テングコウモリは４月～５月に個体数が最大となるが、この時期はすでに観光利用が再開されている。また、コキクガシラコウモリに関しては夏期に少数ながら確認された。今後は観光利用時期に大久保間歩を利用しているコウモリの動態を検証し、適切な利用がなされるための基礎資料としていきたい。

謝辞

本調査を実施するにあたっては、石見銀山世界遺産センター内の島根県教育委員会文化財課、大田市教育部石見銀山課、石見交通株式会社の担当者には様々な便宜を図っていただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

（安藤 / 島根県立三瓶自然館）

引用文献

安藤誠也・大畑純二．2018．世界遺産登録後の大久保間歩におけるコウモリ個体数の推移．世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究８：21－25.

船越公威．2007．冬眠するコウモリ．コウモリのふしぎ，pp．176－179．技術評論社.

船越公威・内田照章．1978．温帯に生息する食虫性コウモリの生理・生態的適応に関する研究：II. 洞穴棲コウモリ数種の冬眠および冬季の活動性について．日生態会誌28：237－261.

庫本　正．1977．日本の哺乳類（15）翼手目　キクガシラコウモリ属．哺乳類科学35：31－57.

大畑純二．2007．石見銀山遺跡大久保間歩のコウモリ．島根県立三瓶自然館研究報告５：15－24.

大畑純二．2016．島根のモモジロコウモリとテングコウモリ．島根県立三瓶自然館研究報告14：19－26.

大畑純二．2017．島根に生息する２種類のキクガシラコウモリ科とユビナガコウモリ．島根県立三瓶自然館研究報告15：31－43.

澤田 勇・大畑純二．1992．大久保間歩に見られるコウモリの冬眠コロニー．遺伝46：46－48.

島根県大田市教育委員会．2009．石見銀山世界遺産センター 2008年報，pp.85.

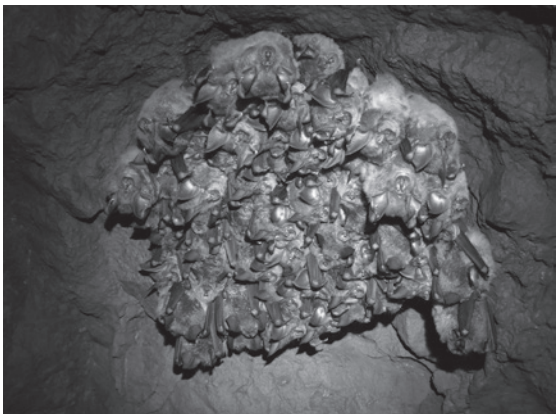


図１　キクガシラコウモリの群塊

図２　コキクガシラコウモリ

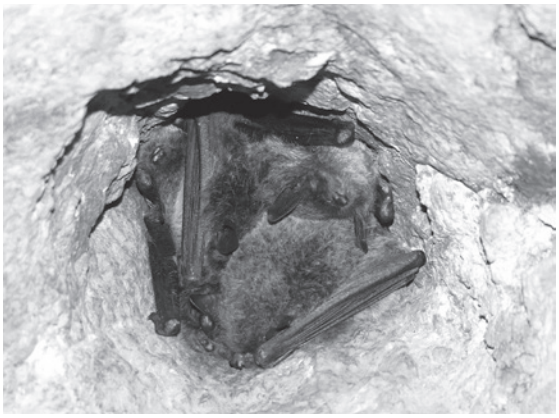


図３　モモジロコウモリの群塊

図４　ユビナガコウモリの群塊

図５　テングコウモリ

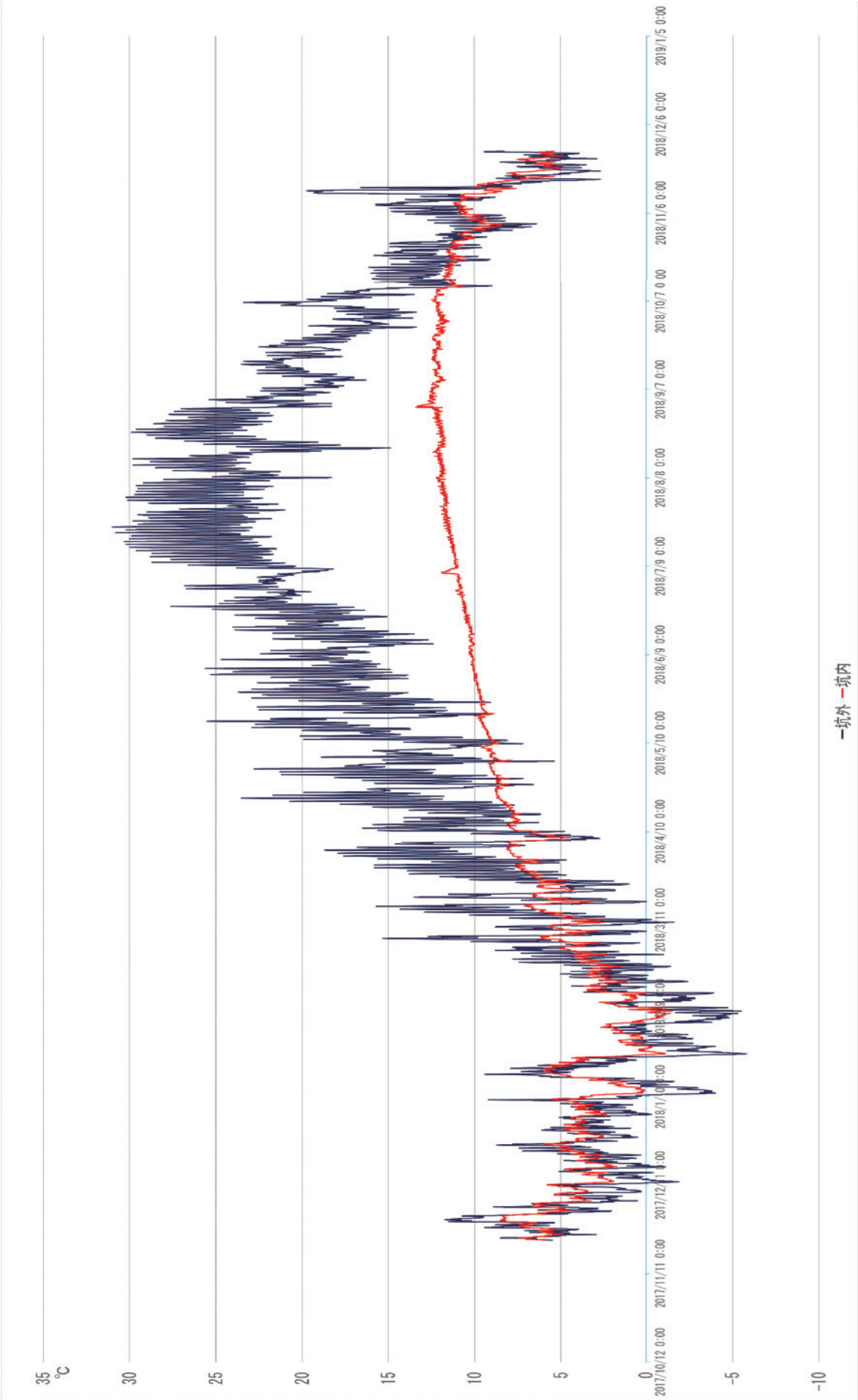


図６　大久保間歩における2017年11月22日～2018年11月26日までの温度変化（赤色は坑内、青色は坑外）。計測単位は℃。

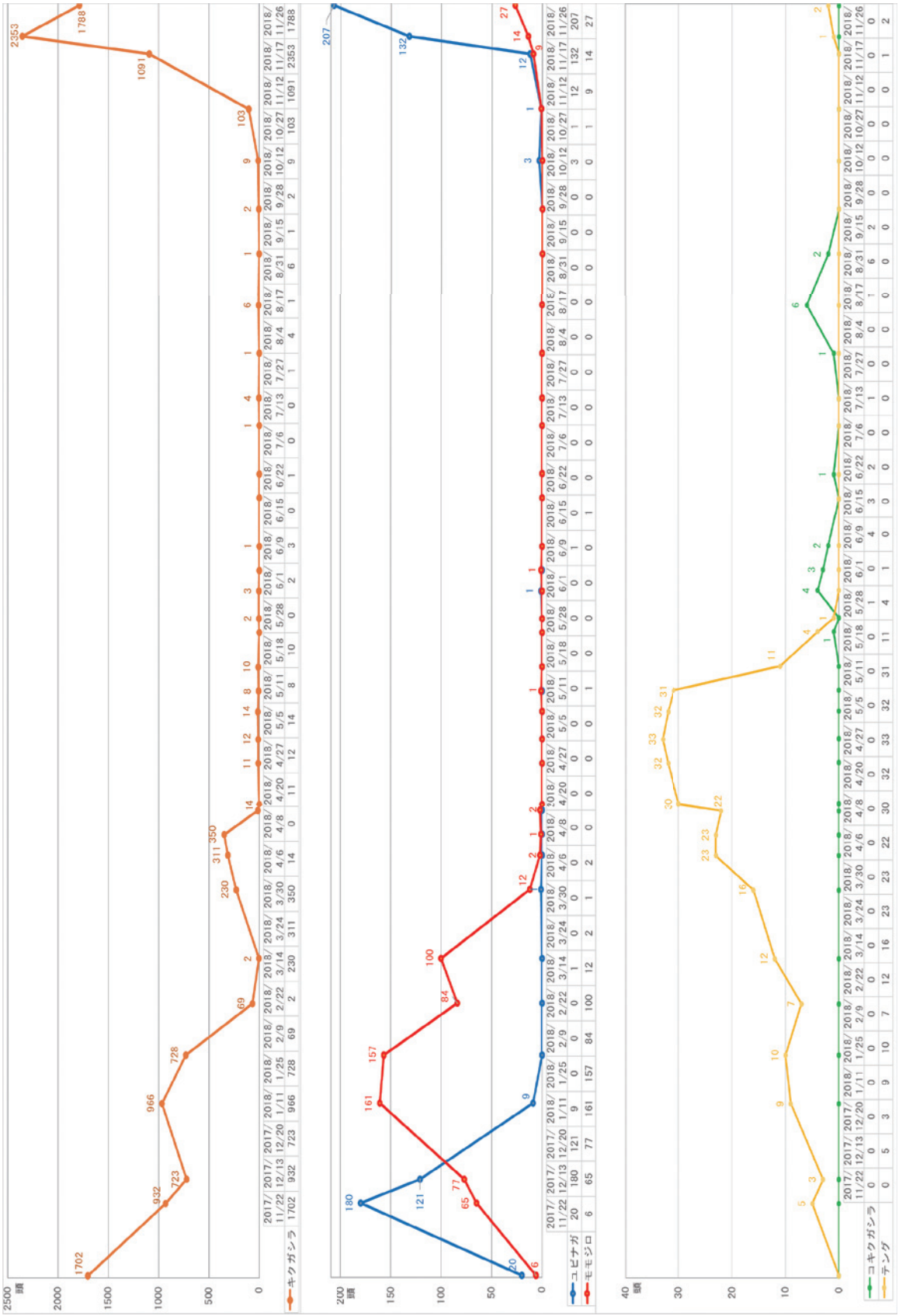


図７　大久保間歩における2017年11月22日～2018年11月26日までのコウモリ類個体数の推移。

史料紹介　島根県立古代出雲歴史博物館蔵「嘉戸家文書」所収の中世史料写

伊藤　大貴

はじめに

平成三〇（二〇一八）年、島根県立古代出雲歴史博物館は石見国邇摩郡波積南村（現在の江津市波積町南）の嘉戸家文書を購入した。当該文書群には約一三〇点の史料が含まれているが、その中にこれまで未紹介の中世史料写が存在している。昨年九月、石見銀山遺跡にかかる文献調査を実施した際、石見銀山の外港・温泉津に関係する複数の史料を確認した。また、戦国期の嘉戸氏については具体的な動向が従来知られておらず、その点においても貴重な史料である。そこで本稿では嘉戸家文書に含まれている中世史料写の紹介を通じて、今回新たに見出した若干の知見を示したい（翻刻文は本稿末尾に掲載）。なお、史料上では「賀戸」や「加戸」といった表記も確認できるが、本文中の表記は史料引用時を除いて「嘉戸」に統一している点を予めお断りしておく。

（一）嘉戸家の概要

まず、嘉戸家の概要について。「嘉戸家文書」所収の由緒書等によれば、和気清麻呂の子孫で石見国那賀郡都治郷を本拠地とする国人・都治氏から分かれた一族であるという。もとは下都治に居住しており、都治地域の土豪の一員であったというが、応永年間以降に波積南村の「白兎屋敷」に移住したという。ただし、これらの来歴がどの辺りまで事実を伝えているのか不明である。近世の嘉戸家は石見銀山料波積南村の年寄（頭百姓）をつとめた家（屋号「白兎」）であったが、嘉戸家の所蔵する古文書については詳しく分かっていなかった。

近世史料の詳細な調査については今後の課題であるが(1)、主に嘉戸家の由緒書類、近世の屋敷譲り証文・銀子借用証文をはじめとした証文類、波積南村内の神社関係竪帳類、嘉戸家やその親戚筋の戒名書付、文政六年渡津村長田絵図、また近代史料としては大森県から「救助方肝煎」に命じられた際の辞令書、貧民救助のため金二〇〇両を納めた際の大森県褒状等などが含まれている。

（二）「嘉戸家文書」所収の中世史料写について

本稿で紹介する中世史料写は一〇点の写しをこよりで綴じた仮綴の形式になっており、表紙はない。各文書の署判欄には「書判」と書いたうえで抹消されており、右横（左横の場合も）に「御花押」と書き直されている。なお、このほかに同様の写しが二点存在するが、こちらには本文の方に抹消・校正した箇所が複数存在しており、清書したものとは言い難い。うち一点には石見銀山附地役人梅津氏の親類書が書き写されているなど注目すべき点も存在するが、中世分に関しては文書の配列順が異なる点を除くと字句の異同はなく、全くの同文である。よって本稿では重複を避けて紹介にとどめておく。

当該史料はすべて写しであり、現時点でその原本は行方不明である。一方、石見銀山料の代官所が置かれていた大森町の有力町人であった熊谷家の文書には　慶応三（一八六七）年正月に波積南村の嘉戸太郎左衛門が長州藩の大森本陣に提出した「御感状御判物書上写」という史料が残されている(2)。この史料には当時の

嘉戸家が所有していた古文書の一覧が掲載されているが、文書番号（一）～（八）の毛利氏関係史料についての記述がみられる。また、「嘉戸家文書」所収の文化九（一八一二）年一二月「相渡申一札之事」によると、邇摩郡小浜村の某が数年来所持していた「毛利元就公書類拾弐本」を「丁銀弐百目」で嘉戸氏が買い取ったという。この証文に登場する文書一二通が今回の史料に該当するのか不明であるが、証文によると、いずれも嘉戸氏の先祖宛ての文書であるという。今回の史料の一部に該当する可能性は高いといえよう。

以上より、今回紹介する史料は少なくとも一九世紀前半段階には嘉戸家が所持していた文書と指摘できる。前述した「相渡申一札之事」を踏まえると、一時的に他家に流出していた可能性が考えられるほか、熊谷家文書にある「御感状御判物書上写」には都治氏関係文書二点の存在が触れられていない(3)。しかし、「御感状御判物書上写」は当時、石見国を占領中であった長州藩に提出した書上であり、毛利氏との関係を強調する内容であることから、意図的に都治氏の文書を除外した可能性も考えられる。いずれにせよ、これら中世史料写しの内容には疑義はないため、実際に当時の嘉戸家が所持していた原本を写したものと見てよいだろう。

（三）戦国期の嘉戸氏をめぐる動き

続いて本節では戦国期の嘉戸氏をめぐる動きについて本稿で紹介した史料をもとに若干の私見を述べたい。戦国期の嘉戸氏とはいかなる存在であったのだろうか。

まず、嘉戸氏の性格について整理しておく。文書番号（九）の「都治隆行書下写」によると、永禄四（一五六一）年九月、嘉戸氏は「久保公事名」を他人に預けたことがわかる。近世に記された同家の由緒書によると、下都治より移住した嘉戸氏は波積郷の「易久保白兎」に居住したという。由緒書は二次史料であるため、すべてを信用するわけにはいかないが、「久保公事名」との関係性が考えられる。また、（三）の「毛利元就宛行状写」では、永禄五（一五六二）年一二月に毛利氏から波積郷内の散在地（合計六貫六五〇文）を給付されている。波積郷内にまとまった所領を持つのではなく、名を単位としつつ、郷内に散在した田地を知行する様子からは村落内部の上層に位置するような土豪という位置づけが相応しい。中世の嘉戸氏は波積郷内の名主層の一員であったと見てよいだろう。

さらに嘉戸氏が「久保公事名」を木屋因幡守に預ける際、都治隆行が許可を与えており、「久保公事名」にかかる諸役の負担を求められている(4)。加えて（一〇）の「都治隆行書状写」によると、年未詳であるが、都治氏の関係者と思しき人物の新庄行き（安芸国ヵ）に嘉戸氏が同行しており、隆行からは「然奉公肝要候」と伝えられている。都治隆行発給文書を見る限り、都治氏が嘉戸氏の上位の存在として関係を有していたことが明らかである。よって嘉戸氏は都治氏の被官であったといえる。『江津市史』では隣接する都治郷の土豪・森氏を取り上げて、同氏を都治氏の被官としているが(5)、この森氏も都治郷内の名を知行する存在であり、嘉戸氏と同じような階層の出身であった。都治氏が嘉戸氏や森氏といった村落上層部に位置する土豪層を被官編成しており、その編成対象は都治郷にとどまらず、波積郷にも及んでいたことを確認できる。

一方、永禄五年以降の文書には毛利氏との密接な関係が表れている。（一）の「毛利元就官途書出写」ならびに（二）の「毛利輝元官途書出写」では、毛利氏当主から官途を付与されている。また、（八）の「高須元与書状写」では、毛利氏の銀山代官衆の一人である高須氏と「加冠」のことについて相談するとある。さらに所領の付与という側面からも密接な関係を見出せる。（三）・（四）の「毛利元就宛行状写」によると永禄五年一二月、波積郷内の散在地を給付されたほか、永禄九（一五六六）年には温泉津町内で屋敷一ヶ所を宛行われている。加えて（五）の「毛利元就書状写」では年未詳ではあるが、温泉津の郊外にあたる温泉三方内でも給地が与えられている。毛利元就から付与された各種の権益については、輝元の代になってもほぼ変わらず安堵されたうえ、元就の時と同様に輝元も嘉戸氏に官途を与えている。こ

のように、年未詳の史料も含むが、毛利氏が尼子氏を駆逐して石見銀山を掌握した永禄五年以降、毛利氏から官途を付与され、屋敷や給地を宛行・安堵されたことは注目すべき点である。

嘉戸氏を被官としていた都治氏については、『江津市史』によると天正年間以降、最終的に小笠原氏に取り込まれていくという。同じく『江津市史』によれば、波積郷も小笠原氏の所領となったと指摘されているが、実際のところは石見吉川氏の所領も確認できるなど、波積郷をめぐる領有関係は複雑であった。そうした中にあって都治氏の被官であった嘉戸氏は毛利氏との関係を深めていった点には留意したい。同じく波積地域に拠点を構えた石見石田氏も毛利氏との関係を深めているが、石見石田氏・嘉戸氏双方とも在地の土豪であることから、波積地域の土豪層の一部は毛利氏の直接的な影響下に置かれていたといえるのではないか。いずれにせよ、本稿で紹介する史料は永禄年間以降の波積地域の様子を知るうえでも興味深い文書といえよう。

（四）嘉戸善左衛門尉と石田主税助

ところで先に述べた毛利氏との関係には興味深い点が存在する。嘉戸氏が本拠を構えた波積郷には、毛利氏を支えた海上勢力として知られる石田主税助（春俊）も本拠を構えていた。筆者は別稿にて熊谷家文書に含まれている石田主税助関係史料を紹介したが(6)、その中に発給日付が嘉戸氏の史料と合致する文書が複数存在している。

【史料二】（年未詳）一二月二〇日「毛利元就書状写」（熊谷家文書二〇―九七―一）

其方事、令馳走候之条、以温泉三方之内拾五貫可宛遣之候、弥軍労肝要候、謹言

十二月廿日　　元就（花押影）

石田主税助殿

【史料二】永禄五年一二月二日「毛利元就宛行状写」（熊谷家文書二〇―九七―三）

石州迩摩郡波積郷内夷免田壱段小分銭四百文・橋詰田大分銭三百文・窪之前田弐段半分銭壱貫五百文・芭蕉ノ本田弐段分銭壱貫弐百文・蜘手之前田壱段大分銭九百文・今宮神田壱段分銭三百文・鳥居之原上下田三段小分銭壱貫五百文・外谷迫田弐段分銭壱貫文之事、為給地遣候、全可知行之状如件

永禄五年十二月二日　　元就（花押影）

石田主税助殿

【史料三】元亀三年一二月一五日「毛利輝元安堵状写」（熊谷家文書二〇―九七―五）

波積之内当知行分幷温泉津町屋敷壱所等事、任去永禄年中洞春常栄証判之旨、全知行不可有相違状如件

元亀三年極月十五日　　輝元（花押影）

石田主税助殿

ここに掲げた【史料一～三】については、嘉戸氏の文書のうち、文書番号（三）・（五）・（七）とそれぞれ日付が一致する。【史料二】と文書番号（五）については年未詳であるが、ほぼ同文の史料である。石田主税助と嘉戸善左衛門の両名に対して同じ温泉三方内で同じく「拾五貫」の給地が付与されている。この他にも同一の日付の文書が存在する点を踏まえると、単なる偶然の一致では済まないだろう。先行研究では石田主税助が波積本郷・温泉津周辺に拠点を持ち、毛利方の警固衆として活動した形跡から波積本郷周辺の浦に舟を持ち、海上での経済活動に従事した勢力であったと指摘されており(7)、その功績もあって給地や屋敷を獲得していったことが見えるが、嘉戸氏も石田氏と同様に温泉津に屋敷を獲得し、温泉三方に給地を与えられている。

永禄一二（一五六九）年の温泉津厳島神社造営の普請奉行として石田主税助の名前が見えることが既に指摘されているが(8)、その造営棟札には「加戸善左衛門」と「加戸神右衛門」の二名も石田氏と並んで記されている。この中に見える「加戸

善左衛門」とは本稿で紹介する史料に登場する「賀戸善左衛門尉」と同一人物であろう。従来は嘉戸氏に関する史料が不明であったため、この点は見過ごされてきたが、石田主税助と同格の存在として嘉戸氏も活躍していたと指摘できる。さらに慶長一六（一六一一）年の温泉津厳島神社造営時の棟札にも石田・嘉戸両氏が本願主として見えるように、両者は同格の存在として同じ史料上に現れる点は興味深い。中近世移行期の嘉戸氏は温泉津に屋敷を与えられ、温泉津の神社の造営を担うなど、温泉津住人としての性格を持ち合わせるようになったことがわかる。嘉戸氏の場合は石田氏と異なり船持衆としての活動を表す史料が残されておらず、推測に過ぎないが、石田氏と同様に海上勢力の一員として毛利氏を支えたのではなかろうか。これまでは史料的制約から石田氏が注目されてきたが、今後は同様の性格を持つと思われる嘉戸氏の存在も無視できないだろう。

おわりに

本稿では島根県立古代出雲歴史博物館が所蔵する嘉戸家文書に含まれている中世史料写の紹介を行いつつ、若干の私見を示した。本史料からは、波積郷の名主層の一人で都治氏の被官であった嘉戸氏が、毛利氏と結び付いて官途や給地を付与され、温泉津に屋敷を構えて温泉津の有力住人として活動した様子を見て取ることができる。とりわけ本稿では、嘉戸氏がこれまで石見銀山周辺の海上勢力として知られた石田主税助と同様の存在である点を明らかにできたと思う。今後は、嘉戸氏らが本拠とした港湾の所在や中世文書原本の行方、他の土豪層の関係史料も含めて検討していく必要があろう。

【注】

（1）かつて嘉戸家が所持していたと思われる文書については、古代出雲歴史博物館が所蔵する他の文書群にも一部が混入している。おそらく同家から流出後、分散したのであろう。

（2）大田市教育委員会寄託「熊谷家文書」二一－二八五。

（3）嘉戸家文書の由緒書（年代不明、近世の成立ヵ）には「都治後城主佐々木小次郎行連ヨリ十五代三河守隆行公之御判二通賀戸へ被遣候也」とあるので同家が都治氏の文書を所持していたのは確かである。

（4）木屋因幡守の詳細は不明であるが、永禄六年閏六月の那賀郡黒松における合戦の際、小笠原方の郎従として「木屋大炊助」の名前が見える（同年同月二七日「小笠原長雄感状写」、「清水家旧蔵文書」八号）。なお、清水家旧蔵文書については、井上寛司「満行寺所蔵石見小笠原氏関係文書」（『郷土石見』一七号、一九八五年）参照。

（5）江津市誌編纂委員会編『江津市誌上巻』（江津市、一九八二年）六六三～六八一頁。以下、本文中の『江津市誌』の引用は同じ箇所を指す。

（6）拙稿「熊谷家文書所収の石田主税助宛て中世史料写について」（『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』八号、二〇一八年）。

（7）目次謙一「石見銀山周辺の「海城」について」（『西国城館論集Ⅰ』中国・四国地区城館調査検討会、二〇〇九年）、本多博之「毛利元就の温泉津支配と輝元の継承」（『日本歴史』七四三号、二〇一〇年）。

（8）前掲注（7）目次・本多論文。なお、棟札の本文は『角鄣経石見八重葎』（石見地方未刊資料刊行会、一九九九年）六〇頁に掲載されている。また、嘉戸家文書にも同じ棟札を写した史料が存在する。

【付記】

本史料の調査・掲載にあたっては、所蔵先の島根県立古代出雲歴史博物館のご高配を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

古代出雲歴史博物館所蔵「嘉戸家文書」所収中世史料写　翻刻

【凡例】

一、文書番号については底本とした「中世史料写綴」（仮題）の掲載順に付した。そのため、必ずしも年代順になっていない。

一、本文については底本のとおり改行した。また、本文には適宜、読点（、）や並列点（・）を加えた。

一、江・而・ニ・茂については原文のまま表記して小活字で示した。

一、抹消箇所については右横に見せ消ち（〻）を施した。

一、貼紙箇所については「」で表し、右横に（貼紙）と示した。

（一）永禄五年八月二六日「毛利元就官途書出写」

任
　善左衛門尉
永禄五年八月廿六日
　　御花押
　元就書判
　賀戸助五郎殿

（二）天正一六年三月九日「毛利輝元官途書出写」

任　又右衛門尉
天正十五年
　三月九日
　　輝元書判
　　御花押
　賀戸助五郎殿

（三）永禄五年一二月二日「毛利元就宛行状写」

石州迩摩郡波積郷かいの木
田五段分銭弐貫文、原之前田
大分銭四百文、上之垣内田七段分銭
参貫文、土橋田壱段小分銭五百文、
清水田小文銭百五拾文、口之切田
壱段分銭三百前、中尾之前田大
分銭弐百文、三俣田小文銭百前
之事、為給地遣候、可知行之状如件、
永禄五年十二月二日　　元就書判
　　御花押
　賀戸善左衛門尉殿

（四）永禄九年一二月一六日「毛利元就宛行状写」

温泉津町之内乃木屋敷一
ヶ所之事、為給地遣候、全可知
行者也、仍一行如件、

永禄九年拾「二」（貼紙）月十六日　元就書判　御花押

賀戸善左衛門尉殿

（五）（年未詳）一二月二〇日「毛利元就書状写」

其方之事、令馳走候之条
以温泉三方之内拾五貫可
宛遣之候、弥軍労肝要候、謹言、

十二月廿日　元就（花押影カ）書判　御花押

賀戸善左衛門尉殿

（六）元亀三年正月二九日「毛利輝元安堵状写」

石州波積郷・温泉郷之内
其方給地弐拾貫目之事、
任当知行不可有相違之状
如件、

元亀三年正月廿九日　輝元書判　御花押

賀戸善左衛門尉殿

（七）元亀三年一二月一五日「毛利輝元安堵状写」

温泉津町之内乃木屋敷
壱ヶ所事、任去永禄九年
洞春証判之旨全知行
不可有相違状如件、

元亀三年極月十五日　輝元書判　御花押

賀戸善左衛門尉殿

（八）慶長四年七月二八日「高須元与書状写」

以上、
加冠之事、斟酌千万ニ候へ共
重畳御理候条、善四郎殿と
申談候而以来何篇別而可申
談迄ニ候、恐々謹言、

慶長四年
七月廿八日　元与書判　御花押

高須市介

賀戸善四郎殿　元与

まいる

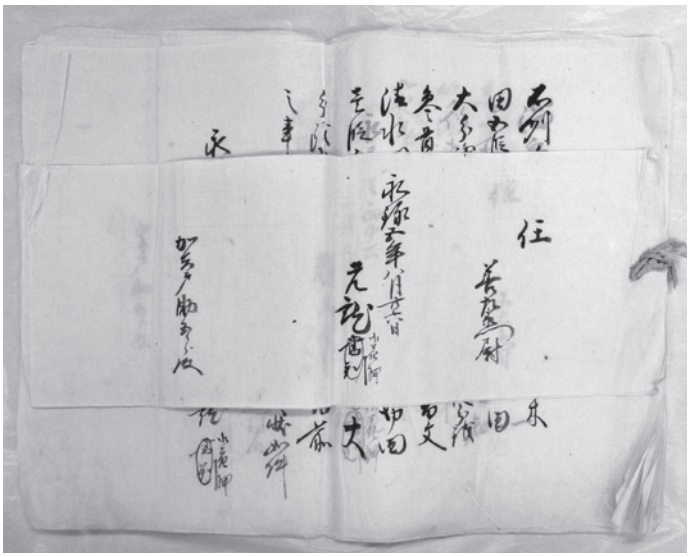
（九）永禄四年九月七日「都治隆行書下写」

久保公事名之儀、従来
年五年分対木屋因幡守
預ヶ可被置事可為祝着候、
諸役等相談仕、堅固之調肝
要候、仍後日之条如件、
永禄四年
九月七日　　隆行書判（ゝゝ）
御花押
門（ママ）亀若とのへ

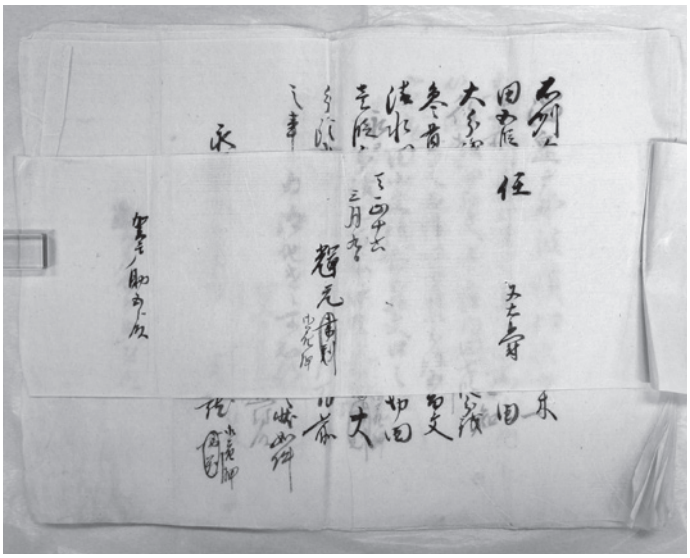
（一〇）（年未詳）四月二六日「都治隆行書状写」

為金太郎供新庄（江）之
儀辛労候、若輩候とも
砦功馳走祝着候、以帰
国之上何様（二茂）可分別候、
然奉公肝要候、恐々謹言、
四月廿六日　　隆行書判（ゝゝ）
御花押
賀戸助五郎殿

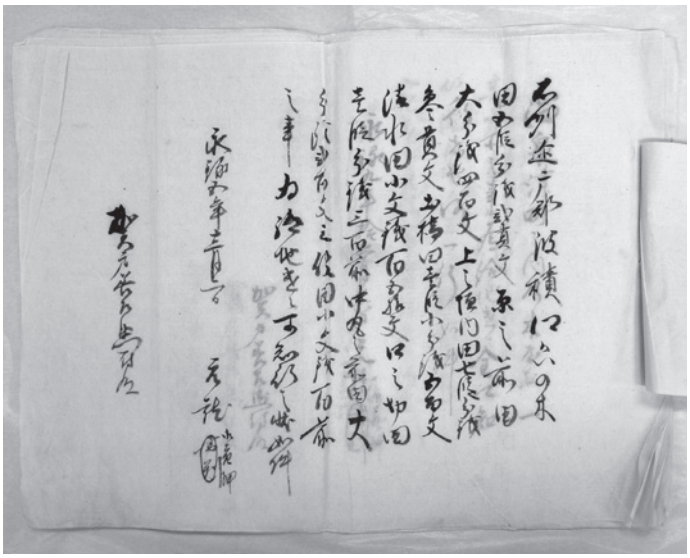
【史料写真】



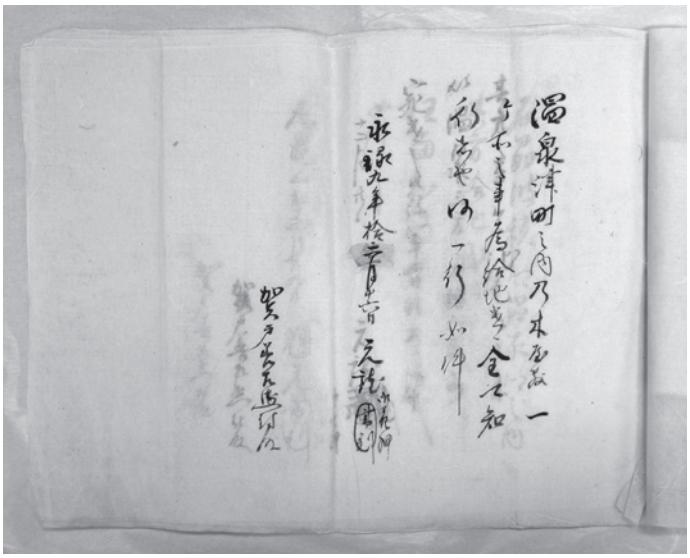
（1）永禄５年８月26日「毛利元就官途書出写」



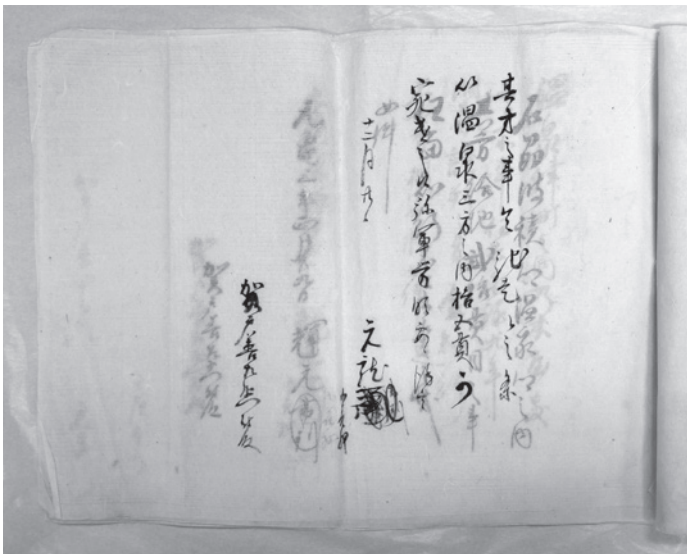
(2) 天正 16 年 3 月 9 日「毛利輝元官途書出写」



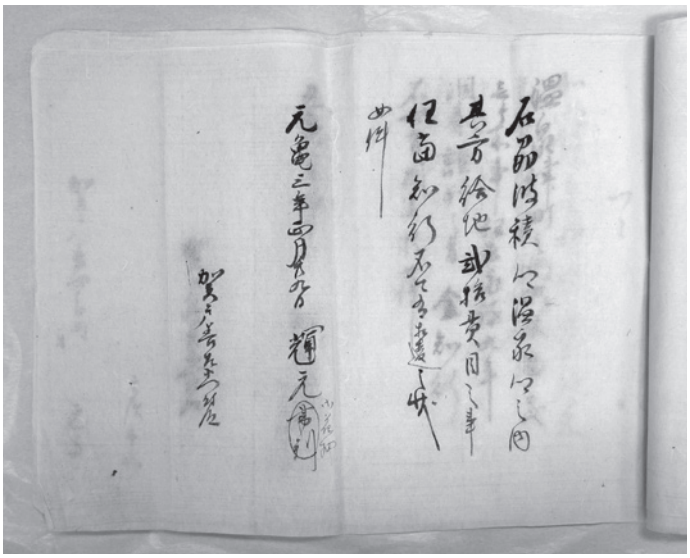
(3) 永禄 5 年 12 月 2 日「毛利元就宛行状写



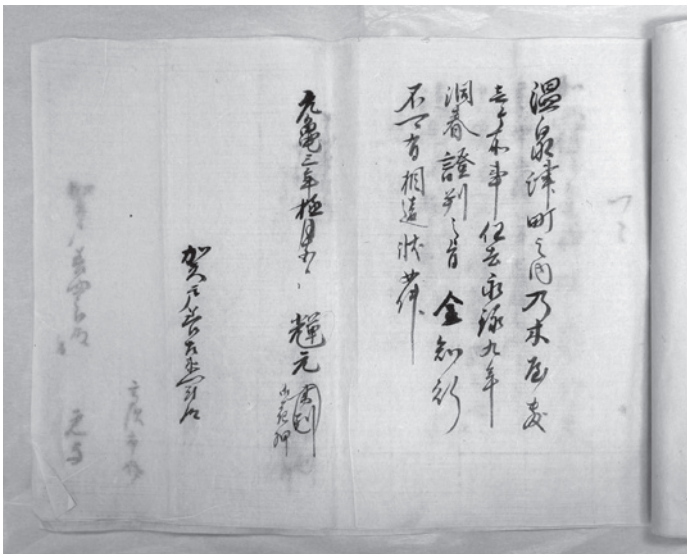
(4) 永禄 9 年 12 月 16 日「毛利元就宛行状写」



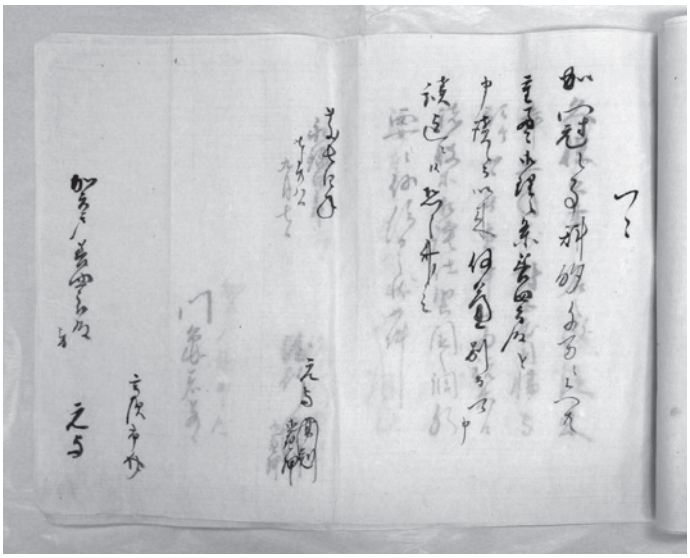
（5）（年未詳）12 月 20 日「毛利元就書状写」



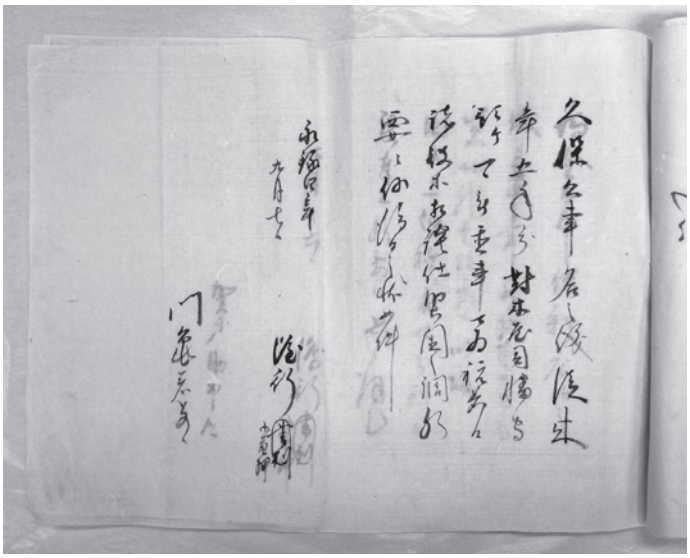
（6）元亀 3 年正月 29 日「毛利輝元安堵状写」



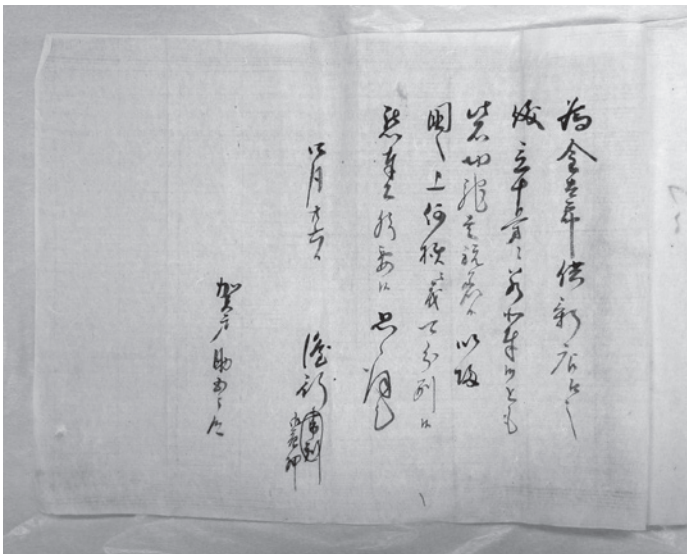
（7）元亀 3 年 12 月 15 日「毛利輝元安堵状写」



（8）慶長 4 年 7 月 28 日「高須元与書状写」



（9）永禄 4 年 9 月 7 日「都治隆行書下写」



（10）（年未詳）4 月 26 日「都治隆行書状写」

世界遺産石見銀山遺跡の調査研究 9

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 9

編　集　島根県教育委員会（松江市殿町 1 番地）
　　大田市教育委員会（大田市大田町大田ロ 1111 番地）

発　行　島根県教育委員会
　　島根県教育庁文化財課世界遺産室（TEL0852-22-5642）
　　URL http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/

発行日　平成 31（2019）年 3 月29日

印　刷　株式会社 報　光　社